

# 教職大学院

## Newsletter

# No. 70

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015. 2. 28

## 宇都宮大が26番目の仲間になりました

宇都宮大学教育学部 松本 敏

本年4月、宇都宮大学が教職大学院を開設することになり、それを記念してこのニュースレターに巻頭言を書かせていただくことになりました。

宇都宮大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻は、全国で26番目の教職大学院です。山梨大以来しばらく止まっていた中で、学部の規模・教員数から考えて教職大学院を作れるはずのない大学が第2波の一番乗りとなったわけですから、感慨も一入です。そのきっかけを作ってくださったのが福井大学の先生方であり、ここで改めて心からの感謝を申し上げたいと思います。

宇都宮大学大学院教育学研究科は、平成10年代に夜間等開講のカリキュラム開発専攻（定員7）、障害児教育専攻（同5）を相次いで設置し、学部の教員養成課程定員150に対して半数に迫る定員70という大きな大学院になっていました。時代の要請に比べるとともに、国立大学の法人化を前に教員の現員を最大限使っておこうという意図もあったと思われますが、法人化後、人件費削減は組織の如何を問わず強行され、結局幾つもの専攻で必要教員数を満たせない状況を生み出しました。入学者数も平成10年代は教員採用数の低迷のせいもあり定員をほぼ充たせましたが、その後教員採用が増えると、教員免許取得プログラムなどで他大学の卒業生に来てもらう努力を続けてもなお、厳しい定員割れとなっていました。

そのようなわけで、教職大学院の制度ができた時にはその流れに乗る余力はなく、松木先生の分析でも、教職大学院が作れるはずのない大学に分類されていました。

私も含めカリキュラム開発専攻の教員は、現職の再教育としての大学院を標榜していましたので、福井大学の取り組みには早くから注目し、毎年ラウンドテーブルに参加し、学ばせていただけてきました。校内授業研究に組織的に関わる「連携研修事業」など学校現場との連携、教育委員会との連携、教育実践に関する交流と省察の場「大学との連携による学校活性化フォーラム」の開催など、栃木県でも一つ一つ積み上げてきました。

忘れもしない平成24年3月3日、福井ラウンドテーブルの昼休みに松木先生から中教審や文部科学省の動き、さらに、前年の暮れに全国の教員養成系大学・学部我突然交付された教員養成高度化の予算の意味について教えていただいたのです。作れるはずのない大学が良質な教職大学院を作るチャンスは今を置いてない。学部に戻ってすぐに学部内の合意形成、学長・理事への説明に動きました。幸いにも理解を得て、方針決定の後、早速、県教委に行き説明を行い、元々あった連携協議会に教員養成高度化専門部会を設置して教職大学院設置のための協議を重ねることができました。この時点では、教職大学

院設置の第2波が来ると言っても教委や学校側では半信半疑だったはずですが、私たちの考えをよく聞いてくださり信じてくださったからこそ、ここまで来られたと思っています。感謝に堪えません。

一步先んじたことで、教員人事においても文科省との折衝においても大きなアドバンテージがありました。学長には裁量ポストを二つ貸していただいて、おかげで素晴らしい実務家教員を早めに確保することができました。既存の修士課程についても、教科教育専攻を学校教育専攻に統合して大括り化し、授業作りや現場での実践に重きを置き、少数にいていねいな指導をするため大幅な定員減を伴う改革でしたが、文科省には予想以上にすんなりと認めていただき、描いた理想に近いものができました。

宇都宮大学の教職大学院では、県派遣の現職教員約10名、その他学卒院生など約5名の計15名定員でコースに分かれません。必修領域を中心として1年目の前期に集中して多くの授業科目を履修させます。授業は現職と若手が一緒に学ぶメリットが生まれるように構想され、現職院生と学卒院生の到達目標を違えてあり、共に学ぶシナジー効果を意識して運営されます。

毎年後期に連携協力校での150時間以上の「教育実践プロジェクト」（1年目の学卒院生は附属学校での「長期インターンシップ」）があり、研究者教員・実務家教員・現職院生・2年目の学卒院生がチームを組んで学校現場における課題の解決に当たります。申請時に31校が希望してくれましたが、教職大学院のチームがやってくるのを心待ちにしておられる学校がいくつもあります。双方ともにプラスになる関係を築きたいと思っています。

毎週金曜日の午後は「リフレクション」の時間で、個・チーム・全体での振り返りや計画の見直しなどを行います。ふだん別々の学校に行っているスタッフと院生が毎週勢揃いして顔を合わせる大切な時間です。それと共に、ネット上に記録と交流の場を作り、各個人やチームがどのように動いているかを一望できるシステムを構築する予定です。刺激を与え合うツールとなるでしょう。

福井大学に学び、実習校は勤務校であっても良いことにしてあります。すでにそれを想定している志願者や学校があるようです。これからは、いよいよ実践でその成果を示す時ですが、スタッフ一同熱い思いで第1期生を待ち構えています。

先輩の教職大学院の皆様、これからもご指導よろしくお願ひ申し上げます。

## 平成26年度 宇都宮大学 大学との連携による学校活性化フォーラムに参加して

福井大学教職大学院 教授 森 透

去る2月14日(土)10時から17時頃まで宇都宮大学教育学部で開催された宇都宮ラウンドテーブル(「平成26年度 大学との連携による学校活性化フォーラム～校内研究授業を元気にする～」)に参加した。昨年はこちらの日程が長野県伊那小学校の公開研究集会と重なり、私は学生を連れて伊那小を訪問していたので宇都宮は今回が初めてであった。昨年は大雪でお互いに帰路が大変であったことを懐かしく思い出すが、今回の天候は晴れて昨年のような心配は全くなかった。ラウンドの主催は「宇都宮大学教育学部地域連携専門委員会(スクールサポートセンター)」、共催は「教師教育改革コラボレーション」であり、主催団体については詳しいことは分からないが、今回のラウンドテーブルは学部をあげて取り組んでおられるように感じられた。

前日の2月13日(金)は本学教職大学院の拠点校である東京都板橋区立中台中学校の公開研究集会であったので、私と半原先生は中台中に参加し、その足で夜に宇都宮市に新幹線で移動したのである。中台中は校長を初め先生方は一丸となって頑張っておられ内容のある研究集会だったという余韻を残しながらの宇都宮市への移動であった。

2月14日(土)は9時に宇都宮駅に到着した中台中の現職院生である星野先生と、私・半原先生、そして昨夜宇都宮で合流した杉山先生と4名でタクシーに乗って宇都宮大学に向かった。10時からは宇都宮大学の学生・院生と福井の院生・教員との交流会であった。福井県教育研究所の研究員4名の方々も参加され総勢20名弱の交流会であった。司会は私が個人的に知り合いの宇都宮大学の丸山先生であったので、気軽に和気藹々と交流が進められたように思う。

12時30分からは全体会で藤井佐知子学部長の挨拶のあと、松本敏先生をコーディネーターとするパネル・ディスカッション「宇大の教職大学院が育てたい力」

が開催された。100名ほどの参加者があり、パネリストは渡辺浩行先生、原田浩司先生、司城紀代美先生で、それぞれのお立場から教職大学院への熱い思いが語られた。1時間30分という限られた時間であったが、育成する3つの力(学校改革力・授業力・個への対応力)について具体的にお話された。

14時10分から16時30分までの2時間20分が小グループでのラウンドテーブルであった。実践を語り合う小グループのラウンドテーブル形式は福井大学が最初に試みてきた歴史があり、現在このようなやり方が宇都宮も含めて、長崎・東京・静岡と全国に広がっている。私のグループは2報告あり、7名参加で若干人数が多いかなという感じであった。細かいことではあるが、机の配置が丸く真ん中の1つの机にグループ番号の表示があったが、この机は不要であり真ん中を空けずに7名の机をお互いにぴったりくっつけた方が至近距離でよかったのではないかと感じた。教室には3グループが同時並行で語り合っているの、グループの内部は出来るだけ近いほうが声も聴き取りやすいと感じた。もう1点注文をつけるとすれば、参加者一覧表はいただいたが各グループごとの参加者一覧表がなかった。各グループの参加者名簿も同時に配布されるとお互いの自己紹介もよりやりやすかったのではないかなと思う。さて、2つの報告は①「特別支援教育の現状と課題～本校の実践から～」(栃木県那須塩原市立厚崎中学校・特別支援学級担任・藤田真知子先生&手塚結美先生)、②「『同じ仲間だから』における資料吟味と授業の工夫について」(日光市立今市第三小学校・大森真弓先生)であった。私が司会者を務めたが、報告の先生方は最初は若干緊張されておられたようであるが、語りだすと熱くなりだし、その実践プロセスでの悩みや感動を紹介され、聴いて欲しい相手を求めていることがよく伝わってきた。報告①は、特別支援学級での取組みであるが、まさしく校長のリーダーシップと深い理解のうえで、新たなチャレンジを行っている実践報告であった。お二人の先生方の真摯で熱い思いがびんびんと伝わってくる報告で、特別支援教育とはいかにあるべきか、保護者との対応、職場での先生方との協働をいかに構築するのか等々、それらをリードするのが校長の役割であることを改めて感じさせてくれた報告であった。報告②は平成26年度後期内地留学生というお立場での道徳の授業実践で、小学校3-5年の道徳資料の内容吟味を通して、道徳授業の在り方を根本から組み変える斬新な取組みの報告であった。道徳教材を「与えられたもの」という受けとめではなく、内容の分析を踏まえた教材の再構成を行うことの重要性が提起された報告であったと思う。福井から栃木に来て、全く異なる土地ではあるが、先生方のテーマと真摯な取組みは、当然ではあるが、全国



どこでも共通する思い、共感する内容に満ちていると改めて感じた。司会者としてうまく運営できたかどうか分からないが、私としては初対面の方々と共感を持って熱く語り合うことができたという感動と充実感を味わうことが出来た。グループの先生方に深く感謝したい。

さて、最後の全体会が16時35分からあり、プログラムに「総括 講評 福井大学教職大学院 森透教授」とある。朝、大学に到着したら松本敏先生に「森さん、よろしくね」と頼まれてしまった。松本先生とは長い付き合いなので断りようもなく、「なんでもしますから」とお返事をした。全体会で私が話したかったことは2つあった。1つ目はこの4月から出発する宇都宮大学教職大学院への激励のメッセージ、2つ目はその内容にかかわる本質的な問題である。前者については、午後のパネル・ディスカッションと小グループでのラウンドテーブルに触れて共感を持って参加できたことをお話しさせていただいた。後者については非常に難しいテーマで、うまく伝えられたどうかは今でも心配であるが、福井大学教職大学院と宇都宮大学教職大学院のコンセプトの違いである。福井では現職院生は勤務校を離れずに大学院に通い、学校の課題を正面から学校の同僚と共に取り組み、その取り組みに大学の私たちも参加させていただくというコンセプトの大学

院で、これが「学校拠点方式」といわれる福井のシステムである。宇都宮の場合は2年間勤務校を離れ、チームを組んで、「外から」学校の改革課題を提案するというシステムと理解した。この理解が正しいかどうかは分からないが、なぜこのようなコンセプトにされたのか。パネル・ディスカッションで3つの力を提起されていたが、この3つの力は非常に重要であり、だからこそ、学校に根ざし、勤務校の同僚と共に現職院生は格闘されることこそがよいのではないか、と思うのである。この点については今後、福井と宇都宮は今までどおり長い付き合いになるので、お互いに学び合いながら、吟味し検証していきたいと考えている。

最後に、今回の宇都宮訪問で福井のメンバーとおいしい餃子とビールで乾杯したことは忘れられない。ボリュームのある、かつ多様な餃子を味わうことが出来たことも感謝したい。当日は福井大学教職大学院で最も重要な「長期実践研究報告会」であった。2年生の院生の2年間の集大成である長期実践を語り評価する審査会であった。私たちは、これの参加を免除されて宇都宮に来ることができたのである。宇都宮はそれだけの内容があったと改めて感じている。松本敏先生を初め宇都宮の先生方に感謝するとともに、福井の同僚の先生方にも改めて感謝したい。

## 福井大学教職大学院 特命助教 半原 芳子

2月13日（土）に宇都宮大学にて開催された「平成26年度 大学との連携による学校活性化フォーラム」（宇都宮ラウンドテーブル）に参加した。昨年に続き2回目の参加となる。午前は「学生・院生交流」、午後は「パネル・ディスカッション」と「教育実践について語り合うラウンドテーブル」という内容だった。宇都宮大学のこのフォーラムには、同大学の関係の先生方、院生を始め、栃木県の多くの市町の教育関係者と現場の先生方が集う。宇都宮大学では来年度から教職大学院がスタートするが、昨年のパネル・ディスカッションでは省察を取り入れた宇都宮大学教職大学院のカリキュラムが議論され、今年は宇都宮大学教職大学院が育てたい力（「学校改革力」「授業力」「個への対応力」）が具体的に紹介・検討された。このように宇都宮大学は教職大学院開設に向け、そのあり方を現場の先生方と広く丁寧に議論を積み重ねてきている。そのため現場の先生方の期待も高く、みんなの教職大学院であるという自負がお会いするみなさんのご発言や気持ちから伝わってきた。宇都宮大学の松本敏先生がパネル・ディスカッションの中で「これからもお互いに議論しぶつかり合いながらいい教職大学院をつくっていききたい」とフロアに呼びかけておられたこと、そしてフロアにいた栃木県の教育関係者および現場の先生方がその呼びかけにしっかり頷いておられたのがとても印象的だった。宇都宮大学教職大学院は現場の先生方と共にある教職大学院としてこの先も歩を進めていくのだろうと確信した。

ラウンドテーブルでは、日光市立栗山小学校にご勤務の芳賀先生の実践を聴いた。もう一人の報告者が欠席だったこともあり、約2時間芳賀先生の実践を聴く機会に恵まれました。芳賀先生は人口減少が進む町で、学校づくりを通じ、地域づくり・町づくりを実践

しておられる。私は福井大学の履修証明プログラムで公民館主事さん達の実践や取り組みをうかがう機会をいただいているのだが、芳賀先生の実践は学校の先生の実践と公民館主事さんの実践をあわせたものであるように思った。芳賀先生の実践を聴きながら先生のこの実践をどのように持続させていけるのかという問いが私の中で生まれた。学校の先生には異動がある。学校教育と社会教育の境目が無い芳賀先生の豊かな実践が、芳賀先生が異動された後も引き継がれ持続・発展していくためにはどうすれば良いのか、そのために聴き手である私は何を考えれば良いのかラウンドテーブル中考えに考えた。実践研究福井ラウンドテーブルの「Zone Cコミュニティ」では、コミュニティの発展における持続性が継続的に議論されている。私はこれまでZone Cに参加していながら自分の中でこの問いをよく吟味していなかったことに気づいた。よく吟味していたならば芳賀先生の実践にもっと寄り添えたはずである。そうした後悔と申し訳なさが残るラウンドテーブルだった。

次は、実践研究福井ラウンドテーブルである。誰かの実践を支えられる自分であるために大いに学びたいと思う。宇都宮で出会ったみなさんとの再会も楽しみである。また、宇都宮と福井のみなさんの実践交流がどんなものになるかわくわくする思いである。



## 福井大学教育地域科学部附属中学校／福井大学教職大学院 准教授 森田 史生

2月14日（土）宇都宮大学ラウンドテーブルに参加した。福井から宇都宮へは、東京に向かい、東京から東北新幹線「やまびこ」に乗って1時間ぐらいで栃木の県庁所在地である宇都宮に到着する。初めて訪れる地にわくわくしながらも、日本の交通網は東京を起点として放射状に広がっていること、東北新幹線は栃木を通過して東北に伸びていること。また、東京へは栃木や群馬からも通勤通学していると社会科で教えているが、我が身で体験することで、新幹線で1時間の距離は通勤可能だと社会科学習の実感ができた。

宇都宮駅に降り立つと、「餃子日本一 宇都宮」の文字とほのかに餃子とラー油の匂いが漂ってくる。宇都宮は餃子日本一の消費量を誇っているだけあって、駅前広場に餃子屋がいくつも見える。こんなにたくさんの餃子のお店を一度に見ることは初めてで、「さすが宇都宮」と感動した。

宇都宮大学は駅よりバスで10分ほどのところであり、福井大学と雰囲気似ていた。午後からのパネルディスカッションは、「宇都宮大学教職大学院が育てたい力」をテーマに、4月からスタートする教職大学院で育成する3つの力「学校改革力」「授業力」「個への対応力」にそって、パネラーから話を聴いた。宇都宮大学教職大学院の理念は福井大学と同様で、理論と実践の架橋や選抜ができる教員、省察できる教員を育成し、教師教育力を向上することである。この3つの力の中から、どの切り口でアプローチしていくかをそれぞれの方向性からの話であった。

その後、実践を語り合うラウンドテーブルが行われた。約90名が13グループに分かれ、1グループ7名の内2名が各60分の時間で実践発表し、語り合う。私のグループは、開設する教職大学院に入学する学部生と現役中学教員、教育委員会、小学校教員2名、ファシリテーターの宇大教職大学院の先生の7名でスタート。発表者の2人は、ともに小学校の研究主任で、校内で「学び合い」の授業研究を進めている実践と現在抱えている課題を中心にした発表であった。現在研究主任が抱える悩みが共通していた。研究は進めているが、先生方に授業改革の意識をもってもらい、どのようにその成果を実感してもらえるかを試行錯誤しながら取り組んでいるというものであった。



話し合いの柱は、①研究主題（サブテーマ）に仮説は必要か？②基礎・基本の習得をしっかりとやるのが大切だ、そこを教えていくのが授業だ！についてどのように考えていくかであった。この2点はどの学校でも直面する課題であり、授業改革、学校改革をしていく第1歩であると思う。まさに、宇大教職大学院がめざす「3つの力」を問う内容であった。この2点については、福井大教職大学院での取り組みや福井大附属中の実践なども交えて話をする事ができた。協働の学び合いや探究型の授業を展開する上では、「仮説－検証－評価」の教師目線の研究では、分析型になってしまい、到達しているかどうかの評価が目がいきがちになる。福井のように実践を通した子どもたちの変容の姿から新たな学びを構築する省察的実践の必要性。そのために子どもの学びをどのように見取っていくかがやはり重要なポイントであると感じた。授業をどのように見ていくといいのか、授業研の在り方を変えることが授業観の変化に通じていくと改めて考えさせられた。

今年度は県外ラウンドにいっつか参加させていた。今まで福井のホームグラウンドだけで発表してきたが、県外に出て自実践を語り、聞くことで、自分たちの実践を捉え直し、方向性を確認することができた。今回、貴重な機会をいただいた宇都宮の先生方に感謝申し上げたい。

## 長期実践研究報告会に参加して

### スクールリーダー養成コース2年／敦賀工業高等学校 谷 康博

長期実践研究報告の提出締切であった1月末日。冬季集中講座からは速度を上げたかった執筆活動も、年が明けて学校が始まると思うように時間も取れず、焦りだけがどんどんと雪のように積もっていきました。毎日1ページずつ書いていけばクリスマスまでには終わるなあと思っていた秋の日、今日から2ページずつ

書けばお正月までには完成できるぞと考えていた冬の夜。あの日々はもう遠く過ぎ去ってしまいました。

また、長期実践研究報告を作成していた日々は「実践」と「記録」の大切さを改めて痛感した日々でもありました。周囲からあれほど何度も忠告され、私自身

も幾度となく反省し努力したことではありますが、ここに来て、記録の三日坊主を再び猛省することとなりました。「しっかり計画を立てて、早めに実行し、記録を残しておきなさい。そして、その一連の活動を継続することが重要です。」とは、私が生徒たちに常日頃から言っていることそのものでした。

それでも長期実践研究報告を何とか形にまとめて、時間のある限り校正を繰り返して臨んだ2月14日の報告会ではありましたが、訂正の芽は春先の大地のように、いたるところから頭をもたげてきました。自然の息吹は力強いものです。いつまでたっても終わらないなあと、私を先の見えない不安な気持ちにさせてくれました。まるで神が与えた試練のように…。

さて、長期実践研究報告会では、書かれていることを単になぞりながら説明するのではなく、長期にわたる報告書全体を掴めるように、内容と流れを説明する形で行われます。よって、報告書をいつも前から後へと順に説明を進めていくとは限らず、場面によっては後戻りすることさえあります。また、何ページにもわたって書かれている実践をサラッと説明する場合もありますし、逆に、重要なポイントとなる展開においては、少ないページの内容をしっかり時間をかけて解説することもあります。報告会当日において1人に与えられた時間は80分です。私は報告の全体的な骨組みを考えたとき、全体の80分を報告の60分と質疑議論の20

分に分けて考えました。はじめは報告の60分を長いと考えていましたが、いざ語り始めてみると、あっという間の60分でした。むしろ時間が足りないさえ思ったほどでした。しかし、報告者にとっては短い60分も聞き手にとってはどのような60分だったのでしょうか。私は報告している間、聞き手のことを十分に意識することができませんでした。それは、私に余裕がない証でもありました。今更ながら、準備不足にも反省です。

今回の長期実践研究報告会は、いわゆる身内における報告会です。2週間後に開催される実践研究福井ラウンドテーブルのクロスセッションにおいては、はじめて会う人にもわかるような説明となるよう工夫をする必要があります。これは、私がかつて学校で暖簾製作を実践していた時に生徒たちに用いた手法そのものでした。そうです、私は学校では教員ですが教職大学院では生徒なのです。教職大学院を卒業するまでは生徒として学ばなければいけませんし、卒業後においては教員として学ぶべきだと、自分の取るべき姿勢を再度確認することができました。

残り少なくなった学生生活ですが、この頃ふとさみしく感じるがあります。これも有意義な2年間を過ごすことができたからだと思います。敦賀工業高校の教職員の方々、教職大学院の先生方、院生の皆さんに深く感謝しています。

## スクールリーダー養成コース1年／勝山市立鹿谷小学校 平林 茂将

福井大学教職大学院では修士論文に代わって長期実践研究報告書を作成する。この日は、2年目の院生にその長期実践を語っていただく日だった。「最後だから、どこか広い講義室で発表を聞くのだろうか」と想像していた。しかし、想像と違い一人ひとりが全体に発表する形式ではなく、グループに分かれてのいつもの発表スタイルだった。いつもと違うのは場にある“熱気”。長期実践研究報告書を書き終えた高揚感が先輩の院生から伝わってくる。編集に関わった教職大学院スタッフたちのあたたかい支える空気が伝わってくる。富永先生（大学院スタッフ）が「この場の雰囲気、周りのグループからもれ聞こえてくる声、それがあるから語れることがある」といつだったかおっしゃっていた。語り手となる院生にとって絶好の場ができあがっていた。

一人の持ち時間は80分。私のグループは、教職専門性開発コースとスクールリーダー養成コースの二人から話を聞いた。二人の内容は割愛させていただくが、インターンシップや特別支援関係の内容で私の経験していないことであった。グループでの語り合いは共感するだけでなく、自分の経験を思い出したり、どうするとよいのか考えたりすることになる。自分の教育実習や新採用時のとまどい、現在進行中の児童・保護者との関係。聞きながら思い出すこと、考えることが多くある。

巨田先生（大学院スタッフ）が「文科省の学び続ける教師という言葉があるが、本来、教師は学び続けるものであり・・・」と語り始める。稲垣先生（大学院スタッフ）が「学生に体育は教えていいんですか？と聞かれることがあった。教えることに臆病になりすぎ

て…」と語り始める。場の熱気に乗って、長期実践研究報告から大学院スタッフの経験・知識・価値観があぶり出されてくる。

この日の冒頭に柳澤先生（大学院スタッフ）が「大学とは何か。批判的に考える力をつける場所であり、探究するコミュニティこそ大学ではないか。」と語られていた。報告会は探究の入り口なのだろう。この場にいると自分の良さも悪さも見えてくるような気がして謙虚になれる。

最近、校内外の多くの場でグループになって話し合うことが多くなった。しかし、同種の考えや経験の人が集まっているためか、ファシリテーターのグループ討議の経験が不足しているためか、中身の濃いグループ討議になっていないことが多い。「どうすれば、自分の学校でこのような探究の場を作れるだろう」と考える。キーワードになりそうなのはESDの構成概念にもある「多様性」、「相互性」、「連携性」だろうか。私が教職大学院に在籍していることをもっと活用して、大学院スタッフ、院生を交え、異なる価値観をもった先生方を意図して分けたグループを作り、語り合う場と時間を確保できないだろうか。「多様性」、「相互性」、「連携性」を磨き合っていく場をつくりたい。

テーマは何がいいだろう。「学び」、「子どもの学びの見とり」、「ESD」、「授業研究」いろいろとある。他者の実践を聴くことは自分の実践を振り返ることにつながり、自分の価値観を多様にし、新たな発想と意欲をくれる。今回の長期実践研究報告会は、教職大学院の醍醐味を味わえた有意義な時間だった。

## 教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属中学校 鈴木 馨

2年間の集大成、長期実践研究報告会に参加させていただいた。当日は雪が降っていて、なかなか車が進まなかった。大学に向かう途中、いろいろなことが頭に浮かんだ。2年間かかわらせていただいた部活動、悩みに悩んだ授業実践、大学で仲間と学んだ日々。なによりも「今日、先生方にうまく伝えることができるのか」ということが不安だった。「気持ち」を言葉で「伝える」ことは難しい。学校現場に出たり、教職大学院でカンファレンスを繰り返したりして学んだことである。

報告会で自分の気持ちや思いを100%伝えきれたとは思っていない。事前に何回も発表練習をしたが、授業と同じでなかなか思っていたように進まない。発表途中で先生方から質問が飛んでくる。「この実践の意味は?」、「この解釈はどういうことなのか?」と聞かれる度にドキドキしたが、このドキドキがなぜか心地よかった。発表の中で、「長期実践研究報告書を書く意味は何なのか?」という話題になった。飯田先生の「長期は書くだけでなく、実践を聞き合い、語り合うことに意味があるのではないか。他の本には絶対載っていないような『本音』が書かれている。私たちはそういうことを知りたい」という言葉が印象に残っている。教職大学院では、語り合う環境が整っている。同じ院生同士で、現職の先生方と、大学の先生方と語り合うことで新たな視点が生まれ、そこから展望を拓いていく。自分のためにしか書かないのであれば、それは日記になってしまう。泣きそうに悔しかったこ

と、泥臭く取り組んだこと、飛び上るほど嬉しかったことを書き記して自分の軌跡をたどっていく。それを見て一人でも多くの人が共感したり、疑問を持ったりする。そこから新たな学びが生まれる。今思うとあのドキドキは新たな学びが生まれる喜びだったのではないか。

同じグループで発表者であった中村先生は、生徒主体の学校行事に着目して、「自己有用感」、「自己存在感」、「自己決定力」を培う指導を提言されていた。ここでのキーワードは、「全員参加」である。例えば、学級通信に自分の名前が載っていると嬉しい。そういう場面をクラス全員に提供する。そのことが生徒の存在理由につながっていく。また、「協働」についての話もあった。生徒に協働的な授業を提案しているが、果たして「協働」に何の意味があるのか。中村先生はご自分の授業実践を切り口に語っていらっしやう。実践報告から、常に自分を省察されているということを感じた。

日々生活していく中で疑問に思うことは多い。家においても学校においても大学においても疑問は出てくる。語り合うことでその疑問を仲間と共有しながら、解決には何が最適な方法なのかを探っていく。2年間、私は多くの人に支えられながら多くのことを学んできた。あと1ヶ月で卒業である。正直寂しい。しかし、別れがあれば新たな出会いもある。「学び続ける」スタンスは崩してはいけない。これからも日々精進していきたい。

## 教職専門性開発コース1年／啓新高等学校 田村 朋久

2月14日、長期実践研究報告会に参加した。

長期実践研究報告会に向けての率直な感情として、普段インターンシップ生としてお世話になっている先生方の目線ではどのようなことを強く意識しているのか、どのような働きかけが学校の変容へとつながるのかということに教育的な目線抜きにしても、単純な興味があるということ。また、私と同じようにインターン生として学校に入り、2年間で何が変わり、どのようなことが変容として表れるのか、という思いのもと、長期実践報告会に臨んだ。

今回の報告会では、発表者として竹野先生、河邊院生の二名、聞き手として前園先生、柘植先生、そして私の5人のグループであった。

長期実践報告の内容については是非各々の報告書を読んでいただきたく思い、この場では割愛させて頂くが、両者の報告における共通点として、「つながり」が非常に大切に書かれているな、と感じた。「つながり」の一言で片づけてしまうと非常に月並みな言葉ではあるものの、長い目線での活動において捉え直すと、先生から他の先生へつながり、その先生から生徒に繋がり、更にその生徒から先生に繋がり、と言ったようにきっかけは小さな波の様なことであっても、それが伝搬・連鎖を繰り返してやがて大きな津波の様な影響力へと変化していくのだなあ、と感じられた。それを体験することがつい最近、私にもあり、ある院生が道徳の授業実践を行い、その授業を授業名人の先生が見られ、その授業を基とした授業公開を行い、それを見た

他の院生がまた同じ教材を使って道徳の授業を行う、ということがあった。時間にして2ヵ月足らずのことではあるが、その期間で学校すらもまたいだ大きな波が出来上がったのである。このように人のつながりというものは忘れがちではあるがとてつもなく大きな力を秘めているのだな、ということを感じた。

このように素晴らしい実践の結果を聴くことができた。しかしながら情けない話、私は長期実践研究報告書に対して恐怖に近い感情を抱いている。と、言うのも普段は朗らかなM2の先輩方が毎夜毎夜死にそうな顔をしながらパソコンに向かってキーボードをたたいている姿を見てきたからである。さらに、スクールリーダー養成コースの先生方でさえ大学に通っている姿を見かけたり、インターンシップ先の先生から長期実践研究報告の大変さをお話いただくことがしばしばあったりしたからである。自分自身、お世辞にも作業の能率が高いとは言えず、それどころか人並み以下と自覚しているほどであるにもかかわらず、スクールリーダーの先生方も非常に苦戦を強いられるという長期実践研究報告の執筆は大丈夫であろうか、という不安感がぬぐえない状態である。

今現在の個人的に思う感情であるため、実情とは異なるかもしれないが長期実践研究報告を書くに当たった2年間で何かを為し、生徒の変化や自分の変化に区切りをつけ、捉え直し文章へと昇華する、というのは容易ではないと感じられる。それどころか現状では問題点ばかりに目が向かい「自分自身が分かってい

ないことが分かった」というような文章になりかねない、という意識さえもある。

しかしながら、今現在インターンでお世話になっている啓新高等学校では多種多様な生徒、先生方、行事があり、生徒たちは勿論自分自身の変化の種というも

のは非常にたくさん落ちていると感じられる。何をみていくか、何を学んでいくか、自分はどの周りと繋がっていくのか、それらをより一層意識してこれからも学んでいかなくてはならない、と強く感じる長期実践研究報告会であった。

## 研究集会・公開研究会の報告

# 長野県立伊那市立伊那小学校公開研究集会

## 小さな職人たち

教職専門性開発コース1年／坂井市立丸岡南中学校 北川 優佳

2015年2月6日、夜。福井大学からバスに乗り込み、長野県伊那市へ向かった。0泊2日の弾丸公開研究会ツアーの始まりである。朝8時前には伊那小学校に到着した。朝からマイつなぎを着た1年生と出会い、これから始まる公開研究会に胸が高鳴った。

共同参観授業では、6年敬組の『自分たちの藍で自分たちの青を出そう～最後の藍建てをして、自分の思う青色に染めよう～(総合)』を参観した。プレイルームに入ると、すでに児童が藍染を行っていた。何十人という大人たちに取り囲まれることには慣れている様子で、真剣に藍と向き合っていた。正直、いつ授業が始まったのか分からなかった。これはチャイムが鳴らず、児童が真剣に向き合っていたからというだけでなく、授業者も児童に溶け込んで活動していたからだと推察する。授業中は個人作業(小さい布小物を染める)およびグループ作業(大きい布小物を染める)のようで、会話する姿はほとんど見られなかった。児童は好きな布小物を染液に“じゃぶじゃぶ”・“ぎゅっ!”, 染液から出して“ばたばた”を繰り返す、水道水で洗うという活動を行っていた。ある児童と授業者の会話を盗み聞くと、「調子はどう?」、「んー、微妙です…」、「顔色は悪くなさそうだけど…pHは?」、「あっ…測ってないです」というような会話をしていた。部外者の私にはさっぱり意味が分からない。勇気を出して児童に尋ねた結果、顔色というのは染液の色だけでなく泡立ち加減やぬめりけなども含めた状態のこと、また酸化する時に色が定着するため、染液のpHを9.5から10.5程度のアルカリ性に保つ必要があることが分かった。ただ藍染を行っているのではなく、専門家から学び、知識を自分のものとして活用していると感じた。これは、プレイルームの壁三面にわたって掲示された実践記録からも読み取れ

た。水道水で洗うと、ようやくどんな青に染まっているのが少しはっきりする。児童同士で「私のこんなに染まったよ!」「〇〇ちゃんの、良い色だね!」と認め合っている姿が見られた。この時、やっと小学生らしい顔を見た気がする。藍染という特殊性からかもしれないが、授業を通して、児童は小さな職人だった。彼/彼女なりのプライドを持って藍染を行っており、他を寄せ付けぬ空気感があった。ただただ圧倒されるばかりであったが、非常に居心地のいい時間を過ごすことができた。これは、児童の想いが伝わってきたからだけでなく、やはり児童の発意を育て、活動をコーディネートしつつも自ら児童と共に活動を行っておられた授業者の尽力の賜物だと推察する。藍染授業後の児童および授業者の手や腕は青く染まり、まるで“アバター”のようだった。

百聞は一見にしかず。教職大学院ではよく話題にのぼる伊那小学校へ実際に行ってみる。総合学習を3年間という長期間で、しかも自由度高く学級裁量で実践できるのは、やはり小学校課程の強みだと感じた。もちろん随所で各教科とリンクしている(例えば、藍染対象の布小物は家庭科で制作)のだが、担任が全教科に携わる小学校ではより柔軟に結びつけやすいと考える。しかしながら、児童の想いを大切にしつつ、3年間を通して学び続けられる・深められる課題を設定するのは難しい。授業者は凝り固まらず柔軟に、そして児童の聲に耳を傾ける必要がある。これは総合的な学習の時間に限ったことではない。あらゆる学校教育の場で、児童・生徒の教育的ニーズを捉え、授業や活動をコーディネートし、学びを保証していくことが大切であると改めて考えた。今回の経験を『すごかった』で終わらせることなく、自身の実践に活かしていきたい。

## 学び続ける教師の存在

スクールリーダー養成コース1年／勝山市立鹿谷小学校 平林 茂将

### 1. はじめに

「伊那小は一度見ておいたほうがいい」大学院の先生から入学前からアドバイスをいただいていた。指導案には、前日の児童全員の様子が書かれた座席表(全

員の様子が記されていた)があった。公開授業前日にも全員を見とり記録することは私にとって衝撃的で、現在私の児童記録に反映されている。大学院入学後、夏季集中講座で伊那小の実践が書かれた「学ぶ力を育

てる」を読んだ。伊那小学校は低学年に教科学習を設定せずに総合学習を設定。中学年以上においては総合活動と教科学習を関連づけて学習を進めている。教科横断的な探求活動が必要と考えている私には、共感でき、参考になる実践が書かれていた。夏季集中講座のグループで一緒になった森先生に「平林先生、ぜひ一緒に行きましょう」と一言いただいていたのも今回の研究会参加につながった。あこがれの伊那小学校訪問。垣間見えた日常活動の様子と共同参観授業の様子から考えたことを報告する。

## 2. 児童の日常的な活動

伊那小学校に到着すると校門玄関横でつなぎの作業服に着替える児童の姿が見えた。「(期待通り)来た。これだな」、私の胸は予想される児童の生き生きとした活動の姿への期待に胸が高なった。氷点下9度になったらしいこの日の朝、子供たちは校舎から少し離れた敷地内で生き生きと羊を飼育していた。1年生の児童が餌箱を持って羊を誘導している。2年生の児童が羊の角を持って羊とたわむれている、餌のリンゴを切る児童がいる、児童のたくましい姿を見てると「小屋の中においで」と、一人の児童に誘われた。小屋は二階建てになっていて、階段は二本の棒に板を打ち付けてあるだけでどう見ても危険だ。大人の私が乗って折れはしないかとヒヤヒヤしながら二階に行く。二階に上ると複数の児童が見晴らしを自慢した。羊の餌小屋と児童の秘密基地の兼用になっている。後で、小屋は全て児童による手作りだと知った。しかし、児童の手に刺さるような棘はなく、釘はしっかりと打ち込まれている。教師による児童の活動を支える見えない支援が感じられた。

校舎周辺を歩くと複数の鳥の声(私にはヤマガラとヒバリしか見分けられなかった)、ケヤキを駆け上るリス、すてきな自然の中に泥付きの長靴が校舎の脇に並べられている。除雪用の器具の多さ、一輪車の数の多さ、腐葉土作成用の枠の多さ、すぐに使えるようにおいてある大工道具、学習に使用するもの(伊那小学校の研究テーマには「内から育つ～“ひと・もの・こと”とのかかわりのなかで、自己をみつめあゆみ続ける子ども～」とある)から伊那小学校の活動が生きていることが伝わってきた。

## 3. 共同参観授業

「活動あって学びなし」とならないように授業を考える必要がある。では、伊那小の授業はどうだろうか。5年生総合活動「劇団春組 お客さんの心を動かす演劇にしよう～『わらぐつの中の神様』をオペレッタフェスティバルで発表しよう～」の授業を参観した。子供たちはいつも通り、といった雰囲気です。

習を始めた後、2グループに分かれて演劇の練習と歌の練習に移っていった。グループ活動も児童だけで進めていく。グループにはリーダーがいて練習を進めていく。グループごとに児童の主体的な活動が展開されていく。児童同士で批判しあうのだが「〇〇君の表情が暗い。」などと聞いていてドキッとするような指摘がある。しかし、仲間からの批判に対して指摘された児童はくじけずに修正していく。多くの教員やテレビカメラが回る中でも、堂々とした子供たちの歌声はすばらしかった。

## 4. おわりに

共同参観の研究協議では、「主体的な児童の姿に感心させられた」、「子供たちの内からの求めに応じた活動だから、これだけ意欲的にできるのだろう」と児童の意欲的な活動が認められていた。一方で、「わらぐつの中の神様」の読みとりが児童の中で共有できていないのではないかと、国語科の取り組みの弱さが指摘されていた。総合活動の共同参観授業で教科との関連も分かる授業展開にするのは難しいのだろう。

しかし、伊那小学校の素晴らしいところは、全国から人を集めるようなスペシャルな教師を売りにしていないことだ。私たちと同じ、いわゆる普通の公立小学校の教員が児童を見つめ、一緒に学び、支えている。この姿は、「伊那小だからできることだ」と一言で終わらせないでいたい。「目の前の児童にとって必要な教材は何だろう、育てたい力は何だろう、これから必要な力は何だろう」と、真摯に考え日常的に行動している伊那小の先生方からは多くのことが学べる。

最後に、ESDの視点から考えてみた。国立教育政策研究所のESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組みに、「ESDでは、持続可能な社会づくりに関わる課題に対して多面的、総合的に探求していくことが求められます。教材や各教科等の内容的な『つながり』、教室・学校と地域・社会・国・世界との空間的な『つながり』、過去・現在・未来といった時間的な『つながり』などを図りながら学習をすすめることが必要です」とある。これは伊那小学校の研究テーマにある「内から育つ～“ひと・もの・こと”とのかかわりのなかで、自己をみつめあゆみ続ける子ども～」に深く通じるものがある。一つの課題に関わって多面的、総合的に探求していくことは伊那小学校の取り組みそのものではないだろうか。総合的な学習の時間数が削られていく今、ESDの視点に立った学習指導を展開していくヒントが伊那小学校に多くある。探求的な学習を小学校だけで終わらせず、小学校・中学校・高校と継続していった時、社会は持続可能になっているのではないかと妄想する。日本に多様な教育があることをうれしく感じた一日だった。

# 伊那小学校の公開研に参加して

福井大学教職大学院／教授 森 透

去る2月7日(土)大学院入試の日ですが、特別なご配慮をいただき伊那小学校の公開研究集会に参加してきました。実は学部の授業「教科生活基礎」(私と小林和雄先生ほか担当)の関係で学部の1-2年生の希望者が約30名公開研に参加することとなり、その同伴も兼ねての参加でした。前日夜の2月6日(金)借り上げ

た大型バスで10時に大学を出発し、夜中の2時に駒ヶ岳サービスエリアに到着。朝まで仮眠して6時起床。洗面・食事を済ませ7時出発。伊那インターを降りて伊那小学校には8時前に到着しました。学校に到着すると子どもたちの元気の良い朝の挨拶に出会いました。自由参観授業は自由にどこの教室も参観でき9時





45分から開会行事。本田俊夫校長先生の歓迎の挨拶ですが、本田先生はいつも決まり切った挨拶ではなく、具体的な子どもの声や姿を織り交ぜながら語るように話されます。いつも感銘を持って聴かせて頂いています。今回も具体的なお話でした。

共同参観授業は3年生生組の「こなつといっしょに」で、雌のゴールデンレトリバーの母親犬と昨年12月に産まれた子犬8匹の授業でした。犬小屋も兼ねた音楽室は8匹の子犬の居場所、母親犬は多くの参観者が来たことで興奮していましたが、鳴くことはなく人と人の間を落ち着きなく歩き回っていました。教師からは知らない人物が近づくといつも吠えるにもかかわらず、当日は全く吠えなかったのはなぜだろうということでした。参観者が子犬をみて笑顔となり柔らかい雰囲気が出ていたからでしょうか。

私がこの犬の授業を見たいと思ったのは、今から30年以上も前に、NHK特集「日本の条件」という番組で伊那小学校が初めて全国放送され、犬のポチの実践が紹介されたからでした。その担任が大槻武治先生で40代の誠実で語りが求道者のような先生でした。その大槻

先生も当日来られて若干言葉を交わすことが出来ました。ご高齢で杖をつきゆっくりと歩く姿は伊那小学校が歴史的に多くの先生方に支えられていることを物語る証でもありました。子犬の教室は子どもたちが子犬を抱きかかえ、えさをやり、一緒に床に寝るという展開でした。子どもたちは子犬と一緒に「癒し」の空間をたっぷり味わい呼吸をしていました。どの子犬にも人間と同じ名前を付けて、担当の子どもが自分の子犬の世話をしていました。45分のほとんどを授業というよりも普段のままのお世話をしていました。最後の10分間で担任の先生が子どもたちに「何か気が付いたことは？」と尋ねていましたが、犬と一緒に寝ている子どももいて反応はゆったりでした。普段のままの、普段通りの授業でした。子どもたちが本当に子犬が好きで、心からかわいがっていることがよく伝わってきました。

最後の14時45分からのフォーラムは、福井大学の松木健一先生がコーディネーターで「ひと・もの・こと」とのかかわりのなかで、自己を見つめあゆみ続ける子どもの姿を共同参観の授業の中で見取る」というテーマのもと、各学年の助言者の先生方が全員パネラーとなりました。このようなフォーラムは2回目なのですが、一人の講演者ではなく各助言者から1年から6年までの総合学習の様子が紹介され、更にその中で学びの実際と課題が浮き彫りになりました。時間があれば、更に論点を深めることが出来ましたが、6名の先生方の語りで時間となりました。教科と総合の関係や子どもの「育ち」の中味、ひたすら子どもと歩む教師の姿の在り方など、伊那小の実践を普遍化していくための議論も必要なことを確認したフォーラムでした。

終了後、正門前で学生たち全員と記念写真をとりバスで帰路につき、夜10時ころに無事に大学に戻ることが出来ました。

## 伊那小学校の公開研に参加して

福井大学教職大学院／准教授 小林 和雄

久しぶりの晴天に恵まれた2月7日（土）伊那小学校の公開研究集会に「教科生活基礎」の学生や教職大学院の院生と一緒に参加してきた。

伊那小学校に到着すると、作業用のつなぎ服をきた低学年の児童たちが元気に走り回っていました。北川院生、平林院生と伴に後をついていくと、羊ややぎの飼育小屋がある「ともがき広場」があった。靴底に消毒のための石灰をつけ、広場に入ると、つなぎ服を着た人懐こい児童に囲まれ「何歳？」「どこから来たの？」などの質問攻めにあった。「福井から来たんだよ。福井って知ってる？」「めがねで有名な県でしょ。おうちにはってある地図で勉強しているから知ってるよ」とあどけない笑顔で答える2年生の地理の知識の確かさに舌を巻く。どうやら全国から集まる来校者を利用して、地理の学習に繋げているようでした。1年生が年齢を訊くのは算数の「大きな数」の学習に繋げているのだろうか。とにかく、挨拶が上手で、積極的に質問する伊那小の子どもたちに朝から感心させられた。

自由参観授業では、黙々と和菓子作りに取り組む6年生の姿に出会うことができた。目にも鮮やかなオリジナル和菓子が、職人が使う本格的な三角ペラを駆使して、次々に創出されていく姿は圧巻だった。どのよ

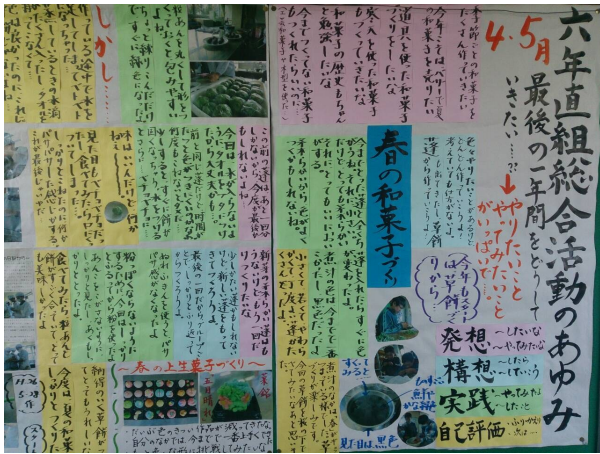


うな総合学習をしてきたのかは、家庭科室の廊下に掲示物として張り出してあった。そこには、発想—構想—実践—自己評価といった、伊那小学校の総合学習におけるロングスパンの探究スパイラルが記され、具体的な実践活動と、生徒の省察による自己評価と新たな発想、構想の流れが示されていた。これは発意—構想—構築—遂行—省察という福井大学の附属中学校のロングスパンの探究スパイラルと類似している。

共同参観授業は5年生のわら靴の中の神様のオペレッタを創作する活動と、1年生のお化け屋敷を創作する活動を参観した。どちらの活動も、自分たちがやってみたい活動に意欲的に取り組む児童の姿が見られた。特に私は、お化け屋敷の材料であるラップの芯を安全カッターで切ろうとして奮闘する男子児童に注目した。堅い芯棒を切りたいという発想、安全ナイフで懸命に擦って溝を広げ、膝を支点にして折って切断しようという構想を実践するが思うように切れない、一部始終を近くで見ていた女子児童が「私が切っただけ」といって芯棒を取り上げようとするが「僕が切りたいの!」と手放さず、喧嘩になりそうにな

る。この問題状況をどう乗り切るのか、傍らでカメラをもつ松木先生と一緒に見守っていた。女子児童が「棒はもう一本あるから、それを切って」と提案する。「わかった」といって納得する男子児童。なんとこの気の利いた対応。担任教師も様子を見に来たが「手、切らないでね」と声かけしただけで、助けようとはせず、児童に問題の解決を委ねた。この女子児童は、さらにもう一人助けに来た女子児童と協働で、この原理を使ったり、安全ナイフの向きや動かし方、力の入れ方を変えるなど試行錯誤しながら、何度も構想を練り直し、10分余りの時間を費やしてついに堅い芯棒の切断に成功した。「切れた!!」と満面の笑みを浮かべる二人の女児の達成感に満ちた姿は印象的だった。まさにショートスパンの探究が実を結んだ瞬間に立ち会えた。伊那小学校の総合学習はこのようにロングスパンの探究スパイラルの中にミドルスパン、ショートスパンの発想—構想—実践—自己評価といった探究スパイラルが組み込まれているフラクタル構造になっている。ロングスパンだけが伊那小学校の探究ではない。ふと顔を上げると、附属中の木下先生もこの授業を参観していた。そういえば、附属中学校の理科の授業も同様にフラクタル構造になっている。教科学習における「探究」を考えると、この視座はとても重要である。

「ひと・もの・こと」とのかかわりのなかで、自己を見つめあゆみ続ける子どもの姿を共同参観の授業の中で見取る」ことができた有意義な研究会で会った。探究スキルの習得が強調される総合的な学習に対して、総合学習は教科の知識やスキルの習得との繋がりが強調されるが、今回の公開研はそれが見えにくかった。松木先生がファシリテートしたシンポジウムでも課題として示されていた教科指導とのリンクが見える授業が公開されることを期待して、伊那小学校を後にした。円い月が綺麗に夕空に光っていた。



## 伊那小学校公開学習指導研究会に参加して

福井大学教職大学院／特命准教授 山野下 とよ子

2月7日(土)朝8時前に伊那に着いた。夜行バスでの眠気を吹っ飛ばすようなピリッとした空気を吸いながら伊那小学校に行く。「おはようございます」の子どもたちのさわやかな声私たちを迎えてくれた。廊下の掲示物はこれまでのあゆみを写真や子どもたちの言葉でまとめたものや作品がずらっとならんでいた。8:40からの全学級自由参観、たくさんのクラスを見たくて、中校舎と北校舎を行ったり来たりしながら回った。どのクラスでも始まりの時間前から活動をしていて、教師が来て始めるのではなく、一人一人が自分たちで相談したりしながら進んでいた。5年秋組の「伊那の民話を人形劇にしよう」、5年夏組の「オリジナルの二畳大凧づくり」、2年智組の「自分たちで栽培した小麦でうどん作り」、3年明組の「アマランサスの実を使っての料理」、4年山組「バタフライガーデンの設計図作り」4年川組「伊那市のマンホール調べ」、6年直組「和菓子作り」、と室内での活動を見て回る。(外のともがき広場での1年毅組「ひつじさ

んとくらそう」や2年勇組「ヤギの出産部屋作り」などは見られなかったが)どのクラスでもそれぞれの活動のめあてに向かって集中してやっている姿があった。特に2年智組の子どもたちが1年生の時から種を蒔き世話をしてきた小麦、その小麦粉でうどんを作っ



お家の人にふるまいたいという願いのもと、およそうどんと呼べないようなだごだごしたうどんを沸騰したお湯の鍋に入れている姿はほほえましかった。また、5年夏組の「二畳大凧作り」で子どもたちは、2mから3mの竹ひごを懸命に小刀で削っていた。竹を削るのはとても力があるし、難しい作業であるにもかかわらず、ほんとに一人前の職人のようにやっていたのには驚いた。後で指導案を読んで、これまでの歩みに一畳凧を50m以上揚げることを達成してきた二畳大凧への挑戦だとわかった。次の各学年1クラスずつの共同参観は5年春組の「『わらぐつの中の神様』を歌を交えて演じよう」を参観した。4年生の時から演劇に取り組み出し、5年生になって国語で読み深めてきた『わらぐつの中の神様』を劇にしようと取り組んできたとのこと。この物語を取り上げたことも驚きだが、それに各場面にあった歌・音楽を自分たちで作っていくことにも取り組んできたことに感嘆した。体育館で明日のオペレッタフェスティバルのための演技や歌の課題をやりながら演じていた。大工役の男子はなかなか気持ちのこもった演技ができず、みんなから厳しいことも言われながら、何度も何度も同じ場面をやっていた。この6場面の大工さんとおみつさんの心情を表現するのは5年生にとって大変難しいだろうし、「もっと」と思うところもあったが、子どもたちは立ちどまり、意見を出し合っていた。もう1つのグループで歌を練習していたが、本当にすてきな歌声だった。

伊那小の公開研究会は本年度で36回目とのことだが、ずっと一貫して「子どもは自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す力をもっている存在である」（「内から育つ」という子ども観が貫かれてきたことに深い感動を覚えた。そしてその子どもたちの「自分たちで作り上げてきたんだ」という生き生きとした姿を直に見て、より確信を持つことができた。「学力向上」ばかりが叫ばれ、子どもの思いや実態とかけ離れた付け焼き刃的な指導ばかりがもてはやされたりする状況を見聞きする昨今、伊那小の取り組みは「子どもの思いを何より大切にして子どもの考えややり方を受け入



れ、学ぶための環境を整えていく」。そのために1年～3年の3年間、4年～6年の3年間は同じクラス、同じ担任で長いスパンで「子どもと共に歩む教師」であり続けている。そんな人間の教育の原則を改めて考えさせられた思いだった。今年度は「ひと・もの・こと」とのかかわりのなかで、自己をみつめあゆみ続けるこどもを」サブテーマに研究されている。子どもが困難と出会い、自分を見つめたり自分に問いかけたりする「立ちどまり」を大切にしてお互いの対話や自問自答を通してどのようにあゆみを進めていくのかを根気強く見取っていく。「内から育つ」ことを信念としていなければできないことだと思う。帰ってから紀要の（付）にある「本校で考える総合学習・総合活動」「各学年・学級の本年度の年間学習計画」などを見て「総合学習・総合活動」を核として教育課程を編成されていることが読み取れた。教科の学習の様子なども学びたいなと思った。伊那小実践に会わせてもらい、ずっと忘れていた「ユネスコ学習権宣言」を思い起こした。『学習権とは読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読みとり、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発揮させる権利である。』…伊那小はこの理念を現実のものとしていた。貴重な訪問だった。

## 平成26年度 福井県特別支援教育センター 実践研究発表会

### スクールリーダー養成コース2年／福井県特別支援教育センター 源甲斐 恵美

平成27年2月12日（木）に、福井県特別支援教育センターの実践研究発表会がありました。この会は、センターが開所されてから32年間、毎年継続されている伝統のあるものです。

今年度は、特別な教育的ニーズのある幼児・児童・生徒への指導や支援のあり方、園・学校ぐるみで取り組む特別支援教育に関する実践研究の発表を通して、広く意見や情報を交換し、指導の一層の充実と教職員の資質の向上を図ることを目的として行われました。幼保園から小中高等学校、特別支援学校までの幅広い校種の先生方、福祉施設の方、教育委員会や教職大学

院の方、他県の教育センターなど様々な分野から約100名が参加され、特別支援教育への関心の高さを感じました。全部で6つの実践発表がありましたが、今回は「授業のユニバーサルデザイン化」に関する小学校と高等学校の取組についての報告と助言者である福井大学教職大学院の松木先生、小嵐先生の話から、私が考えたことを報告したいと思います。

小学校および高等学校（定時制）の取組では、各校独自のスタンダードを作成し、共通のルールをもとに、授業が展開されていました。そしてその取組は、「分かる授業」を柱に、教師同士の協働が生まれ、教

師個人だけでなく、学校全体の力量を高めることにつながっていると感じました。

ここ数年、当センターで行う研修講座や所員が各学校に出向いて行う出前研修では、「授業づくり」へのニーズが高く、特に「授業のユニバーサルデザイン化」をテーマにすることが多くなっています。また、県内では中学校区や学校独自で「授業のユニバーサルデザイン化」について研究を進めている学校も数多くあります。

授業のユニバーサルデザイン化とは、授業づくりに特別支援教育の視点を加味し、発達障害等のある子どもが学びやすいように環境を整理し、授業を改善する、それが結果的に全ての子どもたちに分かりやすい授業になるというものです。松木先生や小嵐先生の助言で、「ユニバーサルデザイン教育といっても、何も新しい取組ではなく、先生方一人ひとりの実践を拾い、整理してユニバーサルデザインの視点で捉え直して校内で共有化していくことが大切である」「一人ひとりの教師が何気なくしていることをインクルーシブの視点で自覚化していく。教師一人ひとりの力量に関わる話であり、一人ひとりの力量を伝え合う、話し合う、その中で子どもを見る目を再確認していく。これは学校全体で取り組まないと進まない話である」といったことばがとても印象的でした。

私はセンターの業務の中で、これまで様々な学校の授業を参観してきました。ベテランの先生方は、授業のユニバーサルデザイン化を意識しなくても、子どもに分かりやすい支援をうまくされています。この会での報告や助言を受けて、私たちセンター所員の役割のひとつに、その意識していない支援を言語化し、意味づけして返していくことがあると感じました。また、授業場面での子どもの様子を語ることで、授業改善につながるヒントを投げかけることもセンター所員ができる学校支援だと改めて痛感しました。

インクルーシブ教育の実現に向けて、小中高等学校に求められる力も変化しています。多様な子ども達が学び合う学級の中で、その多様性を活かしていく学級経営や授業のあり方が問われます。この会を通して、そういったところにも目を向けて、これからのいろいろな学校を支援していかなければならないと考えました。

この会に参加された方は、県内の様々な園や学校で特別支援教育の視点を取り入れて、日々実践研究を進めている現状を知ったことでしょうか。こういった取組を多くの先生方で共有することは、自分の実践や学校の取組を振り返る機会となり、とても意味がある会だったと感じています。実践研究発表会は私にとっても、自分の役割を再確認した1日となりました。

## 東京都板橋区立中台中学校 研究実践報告会

スクールリーダー養成コース1年／東京都板橋区立中台中学校

星野 聡徳

こんにちは、スクールリーダー養成コースM1の星野聡徳です。本校中台中学校は、板橋区から2つの研究指定を受けています。「いたばしの教育ビジョ研究奨励校」と「指導力向上研究推進校」です。建物も教科センター方式の新校舎を建設中であり、仮設校舎の生活とともに研究が平成26年度からスタートしました。2月13日（金）に、これらの研究の中間発表会がありました。福井大学教職大学院から、森先生と半原先生がご来校されました。今年1年間公開研究授業や合同カンファレンスを共に過ごし、中台中学校の成長を見守ってくださり、大変お世話になりました。森先生にはシンポジウムに参加していただき、貴重なご意見をいただきました。

研究テーマは「生徒の主体的な学びを重視した授業の工夫・改善～教科センター方式の導入と活用を通して～<福井大学との連携>」です。生徒の主体性を育てるために、探究型の授業や協同学習などアクティブラーニングの要素を取り入れ、「生徒に教える」から「生徒が学ぶ」へ発想を転換し、生徒が受け身とならないような授業改善を進めています。また、思考力、判断力、表現力を付けることも目的としています。校長、副校長、私を含め各学年から1名の計5名が研究推進委員となり、全体を統括しました。研究は主に教科部会で行いました。「専門性を高める」という方針の

もと、同じ教科内で授業を見合い、情報や教具について話し合いました。

平成26年度は研究1年目でしたが、仮設校舎への慣れや度重なる生活指導などがあり、多忙を極めました。研究は教科内で行ってそれぞれの先生方が自主的に進めていましたが、忙しさのためになかなか深まりませんでした。授業を変えていこうという意志はあるものの、授業準備の時間を取ることがままならず、従来通りの授業を行うことが多くありました。しかし生徒の授業アンケートでは、1学期から2学期にかけて、ほぼ全ての教科で、各項目の肯定的な評価が増えました。例えば理科では、「授業の教材・資料の工夫」が87%→90%、「考えをもって授業を受けている」が78%→81%、「意欲的な授業参加ができていく」が84%→88%でした。これは、各教科の先生方の授業への熱意の結果と分析しています。中台中学校の先生方は皆、生徒のことを考え、丁寧な学習指導・生活指導を行っています。その結果、生徒との信頼関係はとても高いと感じています。生徒は、「先生達何か変えようと頑張っている」ことを感じ、また、1学期から色々な指導の積み重ねの成果として、生徒の気持ちが前向きになっているのでしょう。

中間発表会では、先生方の授業技術よりも、授業に向かう先生の表情、真剣に課題に取り組む生徒の姿が

評価されたと感じます。163名の来校があり、色々なご指導・ご鞭撻をいただきました。成果と言えるほどのものはまだありませんが、生徒との信頼関係が改めて大事であることを認識しました。また、教科センター方式へ向けての意識は高まったように感じます。

先日の2月13日(金)本学教職大学院の拠点校である東京都板橋区立中台中学校の年度末の研究実践報告会に参加した。昨年から関わるようになって3回目の訪問である。早朝雪景色の福井を出て東京に着くと天候は晴れ。狭い日本で日本海側と太平洋側とでこのように天候が違うのかと改めて感じた。池袋駅で半原先生と待ち合わせ一緒に学校に向かった。学校のある東武東上線の上板橋駅は懐かしい場所で、私が学生時代によく来た駅である。

中台中学校は平成26～27年度の2年間は「いたばしの教育ビジョン研究奨励校」指定、平成26年度～平成30年度の5年間は「指導力向上研究推進校」指定の2つの重要な指定校となっている。いずれも平成26年度の今年が出発の年である。しかし、私が思うのは、指定校というのは予算のことも含めてありがたいことではあるが、上からのトップダウンでは先生方の主体的・意欲的な取り組みは長く続かないと思う。やはり、職場の先生方がこうしたい、こうしようという自然な気持ちやあふれ出る源泉がなければ借り物になってしまう。これからが本物を目指すこととなるが、先生方の自然体と、そしてさらなる進歩・改善を目指す意欲と協働を一緒に参加させていただく中で、考えていきたいと切に思うのである。

さて、13時25分から公開授業が始まり、私は北村康子校長先生のご案内ですべての授業を駆け足で参観させていただいた。第一印象はどの授業も生徒たちが主体的に考える場をいかに取り入れるのかという点で工夫されていたことである。ほとんどの授業がグループ学習を取り入れ、先生の発問を受けて、グループで協働して考え合っていた。授業というのは、本日の1コマの授業だけで存在するものではない。一つの単元の流れの中の本日の授業なのである。今日までの学びの過程で、生徒たち一人ひとりはどうのような学びをしてきたのか。何を考え何を意識して今日の授業に臨んだのだろうか。それらの背景を考えながら、私は一つ一つの教室を駆け足で回っていた。



現在の仮設校舎でも、「教科の空間」として生徒の作品やレポートを多く掲示して温かい空間をつくっています。平成27年はどんな1年になるのか分かりませんが、楽しんで研究していければと思います。

## 福井大学教職大学院 教授 森 透

その後は、教科別分科会研究協議が体育館で行われ、各授業者を囲んで丸くなって感想などを出し合っていた。私は数学の分科会に参加させていただいた。習熟度別にクラス編成をしている教科であるが、数学が不得意な生徒が友達に教えてもらい意欲的に学習に参加している様子や、苦手な生徒の意見が採用されたことなどが紹介され、いい授業だなと改めて感じた。

シンポジウムは最後の50分であった。私もシンポジウムの一人であり、短い時間で充分なことを話すことは出来なかったが、私が一番言いたかったことは、今回配布された先生方の指導案はどれも素晴らしいこと、本日の授業もいろいろと工夫されてとてもよかったことである。そして、本日の力が入った授業をもっと自然体(日常性)にしながら、生徒たちの一人一人の学びを振り返り、「実践記録」として残して欲しいということであった。事前の指導案も大切であるが、私はその授業の中でどのような学びが展開されているのか、教師の指導法とともに生徒たちの生の姿を見たいと思った。本日の1時間の授業だけではなく、単元全体の流れ、更には1年間を通して生徒たちの学びの変容を知りたいと思った。「実践記録」を書くということは非常に大変で重い課題となるかもしれないが、やはり「振り返ること」「省察」することは次への展望を見出すためには不可欠であり、同時に勇気付けられることでもある。今の課題は何で、今後どうすればいいのか、という見通しを、「振り返り」(省察)することで確認できれば、次へのエネルギーが自然と産まれてくる。先生方は日々忙しく、実践を振り返ることはなかなか出来ない現実がある。しかし、年度末の今だからこそ、ぐっと踏みとどまって1年間を率直に振り返り、次へのステップを考えて欲しいと切に思うのである。

チャレンジのある意欲的な北村校長のもとで研究が進められ、同時に東京女子体育大学の田中洋一先生という素晴らしい指導者のもとで、日々実践研究が営まれていることは非常に大事なことである。私も福井大学教職大学院として拠点校である中台中学校ともしっかりと深く関わりながら、今後も継続して一緒に学んでいきたいと切に考えている。



冬の研究報告（海外編）中国訪問調査報告 続編

# 中国の教師教育を考える



## 上海師範大学附属第一小学校との協働的实践研究 —「造形遊び」の出前授業をもとに—

福井大学教育地域科学部 学校教育課程

芸術・保健体育教育コース（美術教育サブコース）／教授 濱口 由美

### 1. はじめに

美術科チームの上海師範大学附属第一小学校（以下、第一小と記す）への訪問目的は、教員養成課程での「異文化理解・異文化適応能力」を育成するプログラムとして、国際交流という新たな出前授業先を開拓し、美術鑑賞教育を核とした協働的实践研究の方法論を開発することにあった。今回の訪問では、私も出前授業「造形遊び」の実践者として参加することにした。本レポートでは、第一小の子どもたちとの「造形遊び」がどのようなものであったのか出前授業の実践者としての立場から報告するとともに、出前授業を踏まえた協働的实践研究の場を国外に求めていくことの意味を問うてみたい。

### 2. 国外での初めて取り組む授業実践—「アルミホイルをつかった造形遊び」

第一小での「造形遊び」の授業者は、私と学部4年の安本君。学習者は第一小の4年生たち。調理用品のアルミホイルを「造形遊び」の主材料とするため、大量のアルミホイルを日本から持参していった。ここでは、特に印象に残った活動シーンを取り出ししながら、第一小の子どもたちとの「造形遊び」について綴っていく。

#### (1) マジックショーのマジック

「トゥインクル・トゥインクル」口伴奏と両手で、アルミホイルの輝きを表現しながら、主材料を子どもたちに出合わせた。そして、造形材料としての魅力（一瞬の働きかけで形はもちろんのこと質までもが変化すること等）に興味を抱かせようと、安本君と一緒にマジックショーのような導入を行った。

「パカッ！」まずはペットボトルをアルミホイルで包み込むや否や、アルミホイルをとペットボトルから外し、この擬音語を発しながら変形したアルミホイルをテーブルの上に立てて見せた。3Dプリンター顔負けのアルミホイル性ペットボトルの誕生である。

「ぎゅっ・ぎゅっ」次は箱から引っ張り出したアルミホイルをとねじり、テーブル上に設置していた椅子やそれを包んでいたアルミホイルにつなげてみた。ねじることで強度を得たアルミホイルは、天にも横にも自由に伸びていく力を子どもたちに見せた。

「シャッ・シャッ・シャッ」コピー力のすごさも、1枚の紙皿を型としそこに重ねておいたアルミホイル皿を次々と出てくる演出で紹介した。前のめりになってくる体やうなづき、笑い声などから、子どもたちが

造形材料としてのアルミホイルに興味を抱き始めていることを感じ取った私たちは、両手を差し出しながら、「Let's play」という言葉を子どもたちに投げかけた。

自分では、このマジックショーでアルミホイル世界へ導くための入場切符を手渡したつもりであったが、第一小の子どもたちはこれを目的地が記されていない活動切符として受け取っていたようである。今振り返ると、子どもたちにとっては、このことが一番のマジックだったかもしれない。

#### (2) 「思いつき」をバトンタッチ！

導入活動が終わると、子どもたちは作業台となるテーブルの方へ体の向きを変えた。ほとんどの子が椅子に座ったままである。机上に用意されていたアルミホイルに手を伸ばしながら、アルミホイルの創界を探り出す。ある子は、アルミホイルを箱から10cmほど引っぱり出しては切る行為を数回繰り返す。別の子は、引っぱり出したアルミホイルをとりあえず紙コップやペットボトルに包んでみる。あっちこっちを覗いてきては、また入口へ戻ってくるといった、活動ゴー



ルが見えないことから生じる戸惑いを抱えてのアルミニウムの造形世界への探検活動の始まりのようであった。

そんな中、あるグループの活動が動き出した。そのきっかけは、一人の男の子が、授業者に促され自分の座っていた椅子をテーブルの上に置いたことによる。高くなった椅子に働きかけようとつま先立ちになる子どもいれば、机の下にアルミホイルを垂らし始めた子どももいる。そうこうしているうちに、自分の頭を型にしてアルミホイルの半球型をつくり出す子どもが出てきた。それを見てまねていた子ども一人が、次はアルミホイルを自分の顔に押し付けてみた。ゆっくりと外してみると、自前のアルミホイルマスクが誕生していた。製造時間はわずかに数十秒。その子は、すぐに友だちに見せた。マスクを見て起こる笑いが伝言ゲームのようにつながっていった。同時にアルミホイルマスク製造のブームも起こった。しかし、そのブームもつかの間に終わる。アルミホイルマスクができることを確認した子どもたちの次の興味は、マスクを組み合わせたたり活かしたりしながら別の形を生み出すこと。子どもたちは惜しげもなく、花のようなオブジェや天に向かってメッセージを発する拡声器のようなものへとそれを進化させた。

誰かが思いついた行為が、子どもたちの中であっちにもこっちにも波及していくそのプロセスは、バトンタッチが繰り返されるリレーの練習風景のようであった。バトンを受け取る「こつ」が分かった子どもたちは、さらに自分のいたずらや冒険を加え、周りの友達や次への活動へとそのバトンを送っていった。

### (3) 役割が変化した身体

アルミホイルだけを変化させていたのではない。子どもたちは、身体の一部も変化させていた。ある子は、アルミホイルで髪飾りをつくり髪の毛に巻き付けた。別の子は、頭にアルミホイルの王冠を載せた。友だちとお揃いの「ひげ？」をぶら下げている子もいた。アルミニウムに様々な形と質を吹き込みながら、子どもたちは、身体の一部の意味を、アルミホイルにマスクといった形を与える「道具」から、アルミニウムを使って働きかける「場」へと変容させていたのである。

このことは、子どもたちが自らの身体を通して、微妙な可塑性と保形性を併せ持つアルミホイルの特徴を掴み取っていく「場」の出現と捉えることもできるであろう。さらに、味方を変えると、髪の毛でおおわれている頭や弾力のある頬といったユニークな形や質を保有する身体の一部も再確認できる「場」であったかもしれない。



### (4) 帰国後「バケツのフチック」発見

バケツを囲んで、うずくまる男の子が二人。私も、彼らの横にしゃがみこんでみると、C字型になったアルミホイルがバケツのフチにぶら下がっていた。私は、思わず「Good job!」と発した。C字フック型に変形させ「ひっかけてつなぐ」という方法が、私の活動予想図には記されていなかったからである。「アルミホイルをどンドンつなぐ(例えば、ねじり合わせてつなぐ、穴に通してつなぐ、重ねてつなぐ、並べてつなぐ、鎖にしてつなぐ、等)」という展開が、自分の中で拡張されていく興奮を覚えた。彼らが生み出したC字フックは、さらに場と場を連結させるアルミニウムの架け橋の装飾としてつり下げられていくなど、活躍の場を広げていた。

さらに、子どもたちのC字フックの発見は、帰国後の私に再び興奮の場をもたらせることになった。C字フックが「バケツのフチ」という「場」の意味を問い直した子どもたち眼差しによってした誕生したものであることに気付いたからである。気付かせたのは私の部屋で留守番をしていた「コップのフチ子(コップのふちにぶら下がることのできる日本で大人気のミニチュアフィギア)」。そして、このミニチュアフィギアが多くの人をつかんだのは、コップの「フチ」というあたりまえを問い直したことにあるのではないかと考えたことも考えさせられた。そこで、私は第一小の子どもが発見したS字フックに「バケツのフチック」と命名することにした。

「バケツのフチック」と「コップのフチ子」が結びついてから、私自信も第一小の子どもたちによって働きかけられた「場」であったことに気付いた。活動中だけでなく、帰国後も興奮を与えられるほど働きかけられていたのだ。

### 3. 第一小の子どもたちの場を動かす原動力を探る 「造形遊び」、初体験の第一小の子どもたち。

それにもかかわらず、なぜ、子どもたちはアルミホイルの形をどンドン変化させ、身体やバケツといった「場」を見つけだすことができたのか。ここからは、第一小で参観させたもらった授業や、日本における「造形遊び」の指導内容とも関連させながら、この「問い」について考えてみたい。

#### (1) 第一小の授業と子どもたち

上海師範大学附属第一小学校における一コマの授業時間は35分間。第一小には、造形活動の内容によって選ぶことのできる教室が複数ある。教科担任制をとるため、子どもたちからしてみると毎時間教室や教師が変わる。こういった学習条件や学習環境を受けてデザインされる授業は、実にシステムティックである。教師は、導入時に活動ゴールを明示するとともに、時間内にたどり着くための効率のよい手順を分かりやすく説明する。子どもたちは、黒板に提示された参考作品や教師のやり方をまねながら自分の活動ゴールを目指していく。いつもは、そのような授業を受けている第一小学校の子どもたちにとって、私たちが行った導入はかなり不安を抱かせるものであったのだと思う。

それにも関わらず、どうして子どもたちは導入後のプロセスを自立的につくりだすことができたのであろう。作品をつくることを活動の目的としない造形遊びの活動は、参考作品として紹介できるようなゴールモデルがない。第一小の子どもたちが、そのことに対して戸惑いを感じることを私たちも十分予想していた。そんなときの「手立て」として、「子どもたちの身体

を椅子という拘束の場から解く」「授業者たちも活動者となって積極的に材料や場所に働きかける」といったことも事前に相談していた。確かに、それらもスイッチにはなったであろうが、それだけでは造形遊びのプロセスは動いて行かない。プロセスを動かす力は、やはり日々の教育活動の中で培われてきた子どもたちの学び取ろうとする力や造形的経験知によるところが大きいものではないのか。

## (2) まねる力をコンパスにして動かす造形遊び

「造形遊び」とは、子どもたちが体全体で材料や場所に働きかけ、扱う材料の特徴から発想し、自らが選び、判断し、試しながら表現していく活動である（と、言われている）。しかし、中国の子どもたちの「造形遊び」は、「ストレートに材料に働きかける」行為よりも、「友だちの行為を見て刺激をもらってから材料に働きかける」行為のほうが際立って見えた。子どもたちの関心が「材料となるアルミホイル」より、「アルミホイルに働きかける友だちの姿」へと向いているときに活動が展開していたからである。造形遊びの活動プロセスが、バトンタッチを繰り返すリレーの練習風景のように感じられたのもそのためであったのだろう。第一小学校での造形遊びをこのように捉え直していくと、子どもたちが自立的に動かしたプロセスは、子どもたちの「まねる力」から引き出された賜物であったのではと思われてくる。

第一小で見学させていただいた3コマの授業は、いずれもその時間に一つの作品が仕上がる美術関連の授業であった。そこで、私が見たものは、全ての子どもが美しく洗練された作品ゴールを目指し懸命に取り組む姿であった。どの子どもも、提示された参考作品や教師や友だちの行為をまねることから活動を展開させていく。どんなに材料や方法が限定されていても個々の創造性が発揮できるのが造形活動の面白さであるが、成功体験を味わうためには、モデル作品を土台とするイメージゴールを目指した創造活動でなければならないことを子どもたちは確信しているのもであろう。だから、まねることから活動を始める。子どもたちにとって、「まねる力」は、自分の目指す方向を踏み外さないようにするためのコンパスなのである。

今回の造形遊びでも、まねるための活動モデルを見つけた後の子どもたちの活動は縦横無尽に広がった。活動モデルを見つけた子どもたちは、それを目的地として自らの活動切符に記す。ところが「遊び性」がベースに置かれている造形遊びの活動では、あっちにもこっちにも新しい活動モデルが誕生してくる。そのため、「まねる力」のコンパスの先も、動き回る。活動切符の目的地も、それに合わせてどんどん更新されていく。つくりつくりかえつくりつくり続けていくプロセス創出の鍵の一つがここにあるのではないか。

## (3) 子どものもつ「遊び性」に根差した「造形遊び」

子どもたち一人一人が、その本性に根ざした造形表現の活動を楽しみ、その喜びを味わうことができるよう、創作活動の「遊び性」に着目され、昭和52年版の学習指導要領に登場してきたのが図画工作科における「造形遊び」である。

今回の出前授業は、学習指導要領に記された各学年の指導内容を捉え直す機会にもなった。低学年の「造形遊び」の指導内容には、身近な材料の特徴から思いつき、並べる、つなぐ、積むといった活動を展開させていくといったことが記されているに対し、中学年の「造形遊び」では、材料や場の特徴をもとに、材料を組み合わせる、切ってつなぐ、形を変えてつくるなどしながら新しい形をつくりだすといったような指導内容が記されている。第一小の子どもたちの活動プロセスを学習指導要領の指導内容に照らし合わせて振り返ってみると、「アルミホイルでマスクをつくる」「マスクを組み合わせて新たな形を生み出す」「パケツのフックを発見する」といった子どもたちの活動が、まさに中学年の造形遊びの指導内容と合致していることに気づかされる。

このように綴ってみると、第一小学校で実現したアルミニウムの創造世界造は、子どもたちの「まねる力」と造形遊びのもつ「遊び性」が会うことで生まれたものではないかといった一つの結論が近づいてくる。同時に、「遊び性」に着目した我が国の「造形遊び」は、国境を越えて子どもたちの成長発達を支えて行く活動となるのではないかとさらなる夢も描かせてくれる。

## 4. 終わりに

「異文化理解・異文化適応能力」を育むための教員養成プロジェクトとして、国外での出前授業を踏まえた協働的実践研究はどのような意味があったのだろうか。最後にこの「問い」と向き合うことでまとめたい。

実践者の立場から綴った本レポートを再び読み返してみると、そこからは第一小の子どもたちとの「造形遊び」を探求しているにも関わらず、何度も見ていたはずなのに見えていなかった（あるいは見ようとしていなかった）自国の教育活動の意味や価値を模索しようとしている自分の姿が浮かび上がってくる。それは、第一小の子どもたちの「造形遊び」の活動そのものが、両国の美術教育の特徴が交じり合うことで創造されてきた新たな造形活動であり、双方にとって新たな造形活動を導いてくための示唆や課題を表出させるものであったからではないだろうか。今は、そこに、国外での出前授業を踏まえた協働的実践研究の意味が見えてくるような気がしている。

# 上海の学校とそこで学ぶ子どもたちの姿から

福井大学教育地域科学部附属小学校 教諭 大橋 武史

## 1. はじめに

今回、福井大学の訪問団の一人として、いくつかの学校を訪れた。今回の目的は、福井大学の学生が中国の小学校で出前授業を行い、異文化理解・異文化適応の力を育成する美術鑑賞教育の協働実践研究の方法を

開発することである。出前授業で使用した作品には、私が勤務する学校の子どもの作品が使用された。私は、その出前授業の協力者として関わらせていただいた。私は日本で教員をして10年余りになるが、教員として実際に海外の学校現場を訪れたのは今回が初め



てだった。今回訪れるのが上海の学校と聞き、OECDのPISAでトップクラスに位置する上海の学校現場を見てみたいと思ったし、その中で美術教育がどのように位置づけられているのかも知りたかった。今回訪れた上海の学校とそこで学ぶ子どもたちの姿から、日本と中国の教育のちがいを探してみた。また、国や言葉の壁を超えて、美術鑑賞教育が海外の子どもたちにどのようなものをもたらしたのかを、出前授業の様子から考察したい。

## 2. 上海の学校訪問から感じたこと

近代的な高層ビルが立ち並ぶ上海の中心街から少し離れると、郊外にはまだまだ開発途上の荒地や農村地域が広がっている。バスから見える景色は、現在の中国の様子を色濃く反映しているようで、テレビやネットで目にする中国のイメージと重なる部分と重ならない部分があった。私が訪れた上海師範大学がある上海市徐匯区の周辺は、上海中心街とはちがいで、庶民の町の雰囲気を残す地方都市である。たくさんの露店が並び、早朝には解体された豚のブロック肉を積んだ原付バイクや、荷台から大きくはみ出し数メートルにも積み上がった荷物を乗せた自転車などが普通に道路を横切っていく。都会ではないが、行き交う人や町の雰囲気は活気に満ちている印象を受けた。移動の途中、町を歩きながら、今回通訳等でお世話いただいた劉さんと雑談した際のことである。劉さんは道路沿いに並ぶ店を指さしながら、そこで働いている店員の大半が、農村部から出稼ぎで町に入ってきた人であると説明してくれた。また、農村部では十分な教育が行き届いておらず、小学校卒業程度の教育しか受けていない人がほとんどだという。さらに、農村部では学校が不足しており、小学校に通えない子ども多いとも付け加えた。一方で、休日になると家庭教師の家の前に車が並び、午前と午後、家庭教師の家をはしごする子ども達がいる。小学校から、毎日4～5時間は家庭学習をするのが当たり前で、子どもたちは友達と遊ぶ時間もなく、遊べるのは学校の休み時間だけだという。受験競争に身を置く中国の子どもたちの実際は、日本とは比べ物にならない。劉さんと話したことはこれだけではないが、町の様子を見ながら話を聞いていると、中国が抱える教育の課題があらこちらに見えるようで、非常に興味深かった。

今回訪れた学校は、小学校2校と大学2校である。上海師範大学附属第一小学校と上海市実験学校（小学校）は、まさにエリート校の印象が強かった。大学も含め、いずれの学校でも、担当者が学校説明の中で共通して述べていたのは、PISAの成績（主に算数）や進学率、就職率などの数値的なアピールである。おそらく、どの学校でもそうした数値が学校の位置づけの指標となっているためであろう。また、英語教育の充実や留学生や海外派遣教諭の積極的な受け入れなど、国際社会で活躍する人材の育成をさかんに強調されていた。しかし、非常に興味深かったのは、上海師範大学工学部の学部長さんのお話を伺ったときのことである。ここでも学部の特色や教育課程等の説明をお聞きした際に、大学卒業後の就職先や研究機関等の説明には具体的な数値が示された。その時、福井大学の先生がPISAの話題を出し、「この学校が上海市のPISAの成績を上げているのですね。」と半ば冗談気味に話すと、間髪入れずに学部長さんは「大切なのは、点数ではないのかもしれない。日本はアイデアやイメージの面で優れている。」とおっしゃられた。

その言葉から、工業分野に数多くの開発や研究に携わる人材を送り出している大学が、こうした「アイデア」や「イメージ」の面に課題を持っていることが分かった。残念ながら、この日は時間的な余裕がなく30分程度しかお話を伺うことはできなかったが、モノを生み出す現場に深く携わっておられる方のお話を伺えたことで、PISAに代表される学力とは違った方向から上海や中国の教育をとらえることができた。

## 3. 出前授業の実践から～絵画鑑賞による授業

今回、福井大学の学生が出前授業を行ったのは、大学からすぐの上海師範大学附属第一小学校である。ここでは、福井大学の濱口先生と美術科の学生5名が、日本の子どもたちが描いた絵画作品などを使った鑑賞の授業とアルミホイルを素材に用いた造形遊びの授業を行った。

1コマ目は学生3人の鑑賞の授業である。対象となった児童は3年生の子どもたちである。教室を3つのブースに分け、3班に分かれた子どもたちが移動していく。並べられた作品は、「鳥獣人物戯画」と日本の2年生の子どもが描いた作品である。各ブースでは、学生一人が身振り手振りを交えながら子どもたちに描かれているものを問いかけていく。「問いかけ」とはいえ、言葉が全く通じない。中国の学生の通訳の力をかりるとはいえ、初めて出会った子どもたちとの間には少なからず壁があるの是一目瞭然であった。しかしながら、学生たちは戸惑いながらも、絵をもとに子どもたちとの距離を近づけていった。というよりも、「子どもたちが作品に近づいていった」という方が適切であるかもしれない。

3つのブースのうち、一番盛り上がりつつあったのは「鳥獣人物戯画」を取り上げたところであった。アニメのように描かれたウサギやカエルを見ながら、自然に子どもたちの間に会話が生まれ出す。「チャーヨー！チャーヨー！」突然、子どもたちが絵に向かって叫びだした。見ているのはウサギとカエルの相撲の様子である。近くにいた中国の学生に「チャーヨー！」の意味を聞いてみると、「がんばれ！」という意味らしい。なるほど、彼らは絵に描かれたカエルとウサギの取り組みを応援しているのである。横に目をやると、男の子二人がウサギを投げ飛ばしたカエルの真似をして、両足を大きく開いて得意げな表情で笑っている。さらにその横では、女の子が何やら右手を大きく回して後ろに何人かの子を並べていた。通訳を介して聞いてみると、桶に入った水をすくっているところしかかった。このように、作品に描かれたものが比較的分かりやすいものであれば、指導者が積極的に働きかけなくても子どもたちの間で動きを伴った相互交流が生まれることがわかる。作品自体は、平安時代末期から鎌倉時代初期に描かれた非常に古い作品である。この点から考えると、日本文化が色濃く反映された作品であるとはいえ、現代の子どもたちの生活とは大きくかけ離れたものが描かれている。以前、6年生の子どもたちを担当した際に国語の授業で同じように鳥獣人物戯画の絵巻物を取り上げたが、学年は違いにしろ同じような反応が見られた。こうした作品には、漫画のようなストーリー性が含まれており、想像を膨らませやすい。鑑賞の素材としてはもってこいの作品である。

では、他の2つのブースで取り上げた作品に対する子どもたちの反応はどのようなものであったのか。鑑

賞に使用したのは、日本の2年生の子どもが描いた「ふしぎなたまご」と「かたちからうまれたよ」の作品である。「ふしぎなたまご」は卵の中からいろいろなものが飛び出している比較的分かりやすい絵であるが、「かたちからうまれたよ」の方はいろいろな線や色を使った抽象的な絵であり、何が描かれているのかがわかりにくい。いずれにしても、鳥獣人物戯画に比べると児童の反応も得にくいと、担当の学生は苦慮していた。おもしろかったのは、両方の学生の児童への問いかけ方の違いである。「ふしぎなたまご」を担当した学生は、静かに語りかける手法をとっていた。ダイレクトに言葉が通じないため、児童の反応はいま一つの印象を受けたが、静かに絵を見る児童の姿から子どもたちが絵と静かに向き合っていることがうかがえ、他のブースとはちがいで、心が落ち着く印象を受けた。また、子どもが作品を見よう見ようとするため、だんだんと距離が近づき、自然と学生との距離も近づいていった。一方で「かたちからうまれたよ」を担当した学生は、絵画を動作化し、どの絵を表しているのかをクイズ形式で当てていく手法をとった。学生の大きな身振りに、子どもたちの間からは自然と笑いがこぼれる。クイズ形式で進めたことで、どの絵を表しているのかを競い合うようにして探す子どもたちの姿が生まれていた。指導者のテンポが鑑賞の流れを生んでいる印象を受けた。問いかけ方に違いはあるものの、児童を引き込むために学生が用いた手法は、作品を中心に据えた鑑賞の授業の基本である。もちろん、課題点はたくさんあったが、言葉が通じない中で、また学校現場をほとんど経験していない学生が、よくあれだけの時間を子どもたちと関わったなど3人の学生を見て素直にそう感じた。

授業の最後に、私のクラスの児童が描いた「附属小学校運動会絵巻物」をフロアの中央に広げ、それをもとにした作品鑑賞を行ってくれた。長さはおよそ7mの大作である。巻いてある作品を広げると子どもたちの間から歓声があがった。学生が鳥獣人物戯画を取り上げたのも、この作品を最後に提示することを前提にしたものであろう。よく考えた流れであると感心した。児童の反応は思った通りで、日本と中国の運動会の種目の違いに目を向ける子が多かった。子どもたちの間に入って彼らの様子を見ていたところ、何人かの子どもから同じ質問を受けた。それは、学校のグラウンド横に描かれていた大きなおにぎりとおバナナである。おそらく、唐突に描かれているそれらのものが不思議でしかたなかったのであろう。これを描いた子は、運動会で家族と食べたお弁当がおいしくて、その時に食べた2つを強調して描いた。そのことを質問した子に説明してあげると、へえーと納得していたが、他の子も同じところを繰り返し指さしている。周りの子どもを見てみると、運動会当日の天候を雲に乗った雷様で表した絵や空から見下ろしている巨大な自分の絵など、現実世界にはあり得ないものを指さしながら、何やら話しこんでいる子も多い。鑑賞後の子どもの感想の中で、「日本の子どもたちの自由な発想が描かれていてすばらしい。」という意見があった。通訳を介しているため、実際にそう話していたかどうかはわからないが、子どもたちは異国の子どもたちの作品から、文化の違いを感じ取り、そこに興味を示したことに間違いない。おそらく、今回は日本の作品を中国の小学校で紹介したが、逆に日本で同じように中国の子どもたちの作品を紹介しても、同じような反応を示

すであろう。子どもたちにとっては、異国からやってきたものというだけで、興味、関心がぐっと高まる。それが、自分と同世代の子が描いた作品ならばなおさらであろう。そして、自分の国の文化との違いに目を向け、自然と周りの友達との対話が生まれていた。

#### 4. 出前授業の実践から～造形遊びによる授業

出前授業2コマ目は、濱口先生と学生による造形遊びの授業であった。対象となった学年は4年生である。

教科担任制を敷いているこの学校では、個々の教師が専門的に教科指導を行っている。いくつかの学年で美術の授業を見せていただいたが、扇づくりや水墨画など技術指導が中心の内容であった。廊下や階段には、美しい子どもたちの習字や造形作品が展示され、芸術や伝統文化を大切にしている学校の気風が感じられたが、どこか画一的な印象を受けたのは私だけではないはずである。この学校の校長先生からの学校説明の中には、教科書中心の授業から、教師の発想や子ども主体の授業に変わりつつあると説明を受けたが、私が参観させていただいた授業からは、「知識や技術を教えること」が指導内容の中心になっているという印象を受けた。そうした中で日本の図画工作科特有の分野である造形遊びの授業が、中国の子どもたちにどのように受け入れられるのかが非常に気になった。

導入の課題提示は、濱口先生が英語で行った。児童は英語での説明を十分に理解できていた。彼らの英語力の高さが見て取れた。その後、日本の学生が今回の材料であるアルミホイルと、簡単な使い方を説明した。日本の子どもたちであれば、アルミホイルを目の前に置いただけで、すぐに丸めたり、にぎったりと材料に対して何らかの働きかけをすることが予想できるが、この学校の子どもたちはすぐには活動に入らない子が多い。教師が示したこと以外のはしよとせず、「試す」ということをあまりしないのである。造形遊びは、何かの作品を作っていくわけではない。上海の子どもたちにとっては、いったい何をしたらいいのかわからなかったのであろう。この反応は子どもたちだけではなく、私の横にいたこの学校の女性教諭は、終始いぶかしい表情で子どもたちの活動を見つめていた。

しかしながら、その様子を見た学生が動き出した。各テーブルを回りながら、椅子にアルミホイルを巻き付けたり、器を包んでみたりと、簡単な例をグループの状況に合わせて示していった。すると、どのテーブルでも大きな流れが生まれ始めた。どの班でも、「試す」行為が繰り返されるようになったのである。ここからは、さすがは子どもである。アルミホイルを巻き付け、つなぎ、かぶり・・・さまざまな試行錯誤が繰り返されていく。私が観察していた班では、一人の男の子がグループから離れて小さな人形を作っていた。しかし、アルミホイルを丸めた頭が、後から作った胴体部分にどうしてもつながらず、少々飽き始めたその子が、後ろにいた友達にその人形を手渡した。すると、その友達もおもしろいと思ったのか、隣にいた女の子に見せようとした。その時、その人形の頭がとれて、手元から床に落ちこちてしまった。そこで、3人は大笑いした。ここでこの話が終わるのかと思ったその時である。さらに近くにいた子が、手に持っていた大きなアルミホイルの塊をその子たちに見せて何か大きな声で言った。そこから、このグループでは巨大なアルミホイルの人形作りが始まった。最終的に、女の

子がかぶっていた王冠のようなものを人形の頭にかぶせ、杖を待たし、マントをつけて、王様を完成させた。この様子はビデオ記録として持ち帰っていたため、後日何度か見たが、見れば見るほど材料をもとにした個人の試す行為から、協働による制作活動に発展した状況がよく表れていた。まさに、チームとしてグループが機能した状況を目の当たりにしたのである。



##### 5. 子どもたちの姿から見えたもの

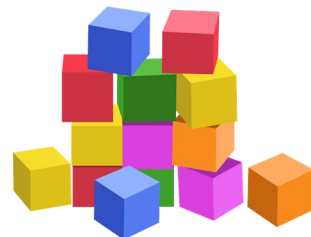
前述したとおり、この学校で行われている美術の授業は、知識や技術を伝えることを中心に行われており、教師主導の一斉指導の形態が主流なのかもしれない。しかしながら、造形遊びの授業の際に見られた子どもの自由な発想や子どもたちが協働する中で学び合う姿から、学び方に違いはあれ、子どもたちの中にあるものは日本の子どもたちと何ら変わらないのではないかとということである。一斉指導の中であれ、課題に向き合う子どもたちはどの子も真剣で、一生命であった。中国の伝統的な美を重んじるこの国特有の文化が、子どもたちの中に養われていることは、子どもたちの様子や作品からも感じる事ができた。

これらのことを踏まえて、子どもたちの姿から見えたものとして2点示したい。まず、上海の子どもから感じたのは、技術的な力がどの子どもにもある程度水準まで身につけていることである。2日目に訪れた

教員養成を行っている大学生の美術の授業の教室には、紙粘土の作品が並んでいた。おそらく、100以上の作品が作品棚に収められていたが、細かいところまで非常に丁寧に作りこんだ作品ばかりであった。さらに、最終日に中国の書店に立ち寄り、児童書のコーナーを見て回った。図画工作に関する児童書などがほとんどない中で、幼児向けの書籍の中に日本でいうぬり絵の他に、人物や木、乗り物などの描き方の手順を繰り返し練習できる本がたくさん並んでいた。これらのことから、小学校段階（あるいは幼児の段階）から、系統的に進められている技術的な積み上げが十分になされていることがわかる。

しかしながら、課題として推測できるのは、そうした技術を応用する力や自由な発想や豊かな想像力ではないかと感じた。これも、2日目に訪れた大学の美術科の学生によるフロア展示を見て感じたことである。ちょうどクリスマスの時期に訪れたこともあり、大学内のいたるところでクリスマスに関するイベントが開かれていた。美術科の学生は、この時期に合わせて自分たちの作品をフロアに展示していた。どの作品も丁寧に作ってあるものの、個人の主張が作品から伝わってこない。また、展示の仕方も小さくまとまっており、並べられただけの印象しか受けず、どこかさみしい展示空間になっていた。エントランスホールということもあり、学内で何か制限があったのかもしれないが、日本の美術科の学生ならもっとおもしろい展示空間を作るだろうと思った。この点については、上海師範大学の工学部の学部長さんが述べていた、「アイデア」や「イマジネーション」と結びつくものであるかもしれない。

このように、今回の上海訪問を通して中国の美術教育について感じたことを述べてきたが、上海の学校から日本の美術教育が学ぶ点も多いと感じる。中国では伝統技術を系統的に積み上げていくことで、一定水準の技術力を身につけた子どもたちが育っていることは間違いない。様々な研究会に参加すると、主に中学校や高校の美術専門の先生方から、小学校段階で描いたり、作ったりする際に必要な美術の基礎・基本を身につけないまま上がってくる子どもが多いという意見をよく耳にする。さまざまな課題、問題があるにせよ、すべての子どもがこうした技術的な力をもって育っている中国の伝統文化を重んじ、そうしたものを基盤として学校教育が行われている点から学ぶ点はあるように感じた。今後も今回のような交流が行われるのであれば、中国の伝統文化に立脚した子どもたちの作品をもとに、本校の子どもたちとともにその良さを探り、新たな視点から中国だけでなく、さまざまな国の芸術教育を見つめてみたいと考えた。



## 子どもと共に探る活動

福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース2年 三好 愛

### 1. 当日の活動の様子

当日の実際の活動では、子ども達ははじめ絵が飾られている教室に今から何をやるのだろうかといった不思議そうな表情で入ってきてキョロキョロあたりを見回していた。はじめの挨拶でも、きちんと座って興味津々で私達の方を見ていて、いつもと違う環境に少し緊張しているようにも見えた。

いざ、グループに分かれてスタートの声がかかると子ども達はいっせいに自分たちの1回目のブースへ勢いよく向かっていった。私のブースでも、子ども達は興味津々で絵に近づいて見ていて、私は中に入れずみんなに声がなかなかかかれないくらいであった。そのため自由に子ども達だけに見える時間を少しとった。絵を見て子ども達同士で指をさして何かを言い合っている様子も見られた。2分ほどしてから声をかけ、絵の前に座ってもらった。ジェスチャーゲームをするよという簡単な説明をした後、わかりやすい絵で練習問題を出した。それまで子ども達は不思議そうな顔で私を見ていて一発目はすごく緊張したが、私が前で大きく口を開いて体で表すと子ども達の間では笑いが起こり、「あ！これだ」というように指をさして、少し場の雰囲気が変わったような気がした。

子ども達は次にどんな動きをやるのだろうか？と楽しそうにこちらを見ており、問題を出すと、次は絵のほうを真剣に見てどれが一番当てはまるのか探していた。テンポよく問題が進んでいったので、次に「子ども達の中から誰か私のように問題を出してくれる人はいませんか？」と聞いたところ、伝わり方のニュアンスが少し違ったようで、問題を出すのではなく、絵に対する質問タイムのような感じになった。子ども達は自分が気になった絵を指さして「この絵には何が描かれているの？」と不思議そうに言っていた。「不思議な国のライオン」や「まめとひよこをくっつけたもの」と説明すると、え？そんな組み合わせもあるの？なるほど！といった様子でまじまじと見つめていた。2、3人くらい質問したところで次のブースへの移動となった。移動の間に、活動を見ていた先生から「もっと動きが大きくてもいい」というアドバイスをいただき、自分自身も緊張して少し動きが硬くなっていったようだった。次はもっと思いっきりやろう、恥ずかしいという気持ちは捨てよう！と心に決めて望んだ。

2回目のグループでは、初めに子ども達に座ってもらい、先ほどと同じように説明をして練習問題を行っ

た。先ほど、1つ目のブースを終えたせいか、1回目のグループよりも緊張した様子がなく「次はどんなことをやるんだろう？」とわくわくした表情でこちらを見ていた。私も、アドバイスをもらって緊張がほぐれ、もっと飛び跳ねてみたり声を出してみたりすることが出来た。動きが大きいとその場に笑いが起こり、子ども達も元気よく指をさして答えを探していた。また、今回は正解を当てた子どもに「イエーイ！」と叫んでハイタッチもしてみたところ、子どももうれしそうに返ってきてくれて、言葉がなくても通じている！といううれしさと一体感が生まれた。7問ほど出したところで、「一緒に誰か問題を出してみませんか？」という男子の子が一人、恥ずかしそうにしながらも前に出てきてくれた。男子の子は一つ一つ絵をじっくり見てどれをやるか選んでいた。決まったところで、みんなに見えないように小さく指をさして教えてくれたので、一緒に2人組みの絵を真似て2人で横に並んでひよこひよここと歩く動きをした。自分ひとりでやる時よりもさらに盛り上がり、男子の子も恥ずかしいながらも満足そうに笑っていた。その後何人かに声をかけてみたが、恥ずかしがって迷っている子ども達を誘っている間に、移動になってしまった。

### 2. 振り返り

今回、私が活動の中で特に印象的だったのは“笑顔”と“一体感”であった。活動をする前は、言葉の壁や、普段受けている授業の違いから、子ども達にこの活動を受け入れてもらうことはできるのか、きちんと通用するのか不安で仕方がなかった。普段受けている授業とは全く違う環境・相手と共に「体で絵を表現する」ということはとても未知数でハードルが高いものなのではないかと考えていた。

しかし、実際はというと、子どもも私も活動中は“笑顔”で溢れていたように感じる。そして、みんなが「正解はどれだろう？」と悩んだり、「これは面白い！」と真似をして見たり、また「イエーイ！」とハイタッチしたりと“一体感”があった。

それは、今思うと、私が子どもに与えるというよりも、子どもと私が一緒に探っていくような活動が出来たからではないかと考える。子ども達にとってはこのような活動はもちろん初体験で未知数のかたまりである。そして私自身もこの活動で一体どんなことがおきるのか正直想像できず、未知数なものであった。だからこそ、何もかもが新鮮で何が起るかわからないわ



くわく感もあり、子ども達と一緒に未知数の世界へ向かっていくような高揚感があったのだと思う。

一方で、授業を見ていた先生から「三好さんは、動きのない絵はどうやって表していたの？」と聞かれたときに、自分は「楽しい」や「面白い」という感覚的なもの、目の前で起こっている出来事に手一杯で、「体で絵を表現する」について自分自身の考えがまだまだ足りていなかったことを実感させられた。体で表現する上で自分は「作品から何を読み取り、それをどうやって体で表していたか」ということを意識せずに感覚でやってしまったいたのである。したがって、子ども達に問題を出す上でも、動きのわかりやすいもの、表情があるもの、自分がやりやすいものを自分の感覚で選んでいってしまった、動きの少ないものまでアプローチしきれていなかった。後になって考えると自分は作品から構造や、動き、表情を見て自分の中で全体的なイメージをつくり自分自身がそこに描かれているもの自体になったつもりでジェスチャーしていたと気づいた。それを初めに考えていることが出来たら、もっと幅のある表現やいろんなパターンのアプローチが出来ていたのではないだろうか。

また読み取り方を考えると、私は動きや表情でジェスチャーをしていたが、子ども達のなかには絵の中から特徴的な部分の形を読み取り体でその形を表している子も多かったように思う。例えば、「まめびよ」



という作品では中心の花のような部分がひよこようになっていて、口が特徴的である。それを手で形を作り自分の口に当てて表している子がいた。他にも家の形をしている絵に対して、屋根の三角部分を腕を使って作る子もいた。自分では思いつかないような動きをしている子もあり、いろんな読み取り方があるということが分かった。

はじめは不安で失敗することばかり考えていたが、恐れずに子ども達と活動が出来、また言語が違ってても表情や声のトーン、動きでコミュニケーションをとって感情を共有することも出来、とても良い時間を過ごすことが出来た。

## ごっこ遊びは異世界への入り口

### —主役は君だ！それがストーリー—

福井大学教育地域科学部

美術教育サブコース2年

西本 昂生

#### 1. 子どもは体を動かしたいはず

鳥獣人物戯画という絵巻は日本の漫画やアニメの原典と呼ばれている。中国の子どもにも漫画やアニメは人気で身近な日本文化の一つであるといえ、日本文化を紹介するうえでその原典である鳥獣人物戯画はとっておきの題材なのだ。

しかし、通訳を通じて説明だけをする授業になってしまったら、それは自分と子どものコミュニケーションでなくなる恐れがある。そこで、鳥獣人物戯画に蛙と兎が相撲を取り、応援の中蛙が勝ち、兎が負けるといった「物語」を言葉だけでなく感じて理解できる方が大事なのではないかと考え、ねらいを2つ決めた。

1つ目は登場人物の表情や動きを読み取り、絵巻の中の時間を感じさせ、「物語」があること子ども自身に体感させることだ。そして2つ目のねらいは鳥獣人物戯画の鑑賞が運動会絵巻の鑑賞の時に運動会絵巻の中の時間を感じ、日本の子ども達の生活に興味を持ってもらう事だ。

#### 2. 字幕のない劇場

1回目の活動ではまず子どもの配役を決めた。そしてグループを2つに分け片方の絵を交代してやろうとした。一人一人、絵巻と子どもを交互に指をさし登場人物が描かれたかぶり物を渡していった。そして今から登場人物になりきることを伝えて、“Let's start”と始めた。子どもたちは真似を始めた。しか

し甲巻の相撲をとる動物達の絵の方でのことだが絵の右側と左側が時間的に繋がっていることが分かっていないようでこの2つは繋がっていることを説明しようとしたが上手く伝わらず、私は登場人物を指差しながら1つ1つの動きを実際にやってみた。初めは子どもたちも戸惑っていたが後から自分たちで話したり、絵をじっくり見たりして自分たちでやり始めた。

2回目は始めから一つ一つの絵の動きを丁寧に説明していったが、片方の説明している間、もう片方の様子が見られなくて残念だった。絵をまねて、鹿役の子が兎の役の子を背中に乗せて四つん這いで歩いているのが印象的だった。



もう一つの印象的なエピソードがある。私は応援蛙役の子どもに対して腕を振って“Fight, fight!”という見本を示した。しばらくして再び見ると、彼らは何かを言いながら同じように腕を振っていた。意味も分からずに自分の真似をしていると思い、説明のつもりで隣に行き“Fight, fight!”と一緒にやってみた。後でその子ども達は、中国語で応援していたことを知った。また濱口先生に「子どもにこの物語はどうか聞いたら」とアドバイスをいただいたので、子どもに聞いてみると「面白い」と言ってくれた。私は活動中にこの活動の意図が伝わっているのか、子どもはただ真似をしているだけではないかと不安だったがこの2つのエピソードから私は子どもが話を理解していたことに気づかされた。しかも面白いと思っていてくれたことに驚かされた。

### 3. 運動会絵巻につなげる

2つ目のねらいであった運動会絵巻の鑑賞についても触れておこう。運動会絵巻を床にダーッと広げると子ども達が一気に寄って来ると彼らはじーっと黙って見始めた。話しかけるにも近くに通訳がいなくて言葉を伝えることもできないので子どもの様子を観察していた。絵全体を見るよりも走っている子どもをじっと見ていた。鳥獣人物戯画の鑑賞で絵を良く見てなりきっていたことが活かされ、その子になって見ていた

のかもしれない。途中で話しかけてくる子もいたが何を言っているのか分からず、通訳もいなかったので結局彼が何を言ったのかは分からずじまだった。

### 4. 物語を体でみる

今回の活動を通して子ども達に鳥獣人物戯画の物語が言葉足らずでも伝わったことは私自身予想していなかった驚きである。言葉の壁があっても絵や体の動きを通して壁を超えて伝えられる事があったのではないだろうか。

私自身、物語は言葉であると思っていたがあるが、今回でそれを捉え直した。幼い頃、私もアニメのヒーロー等の真似をしたごっこ遊びをよくやっていた。その時、自分は現実世界がアニメの世界になっていた。今回子ども達のしたこととはそれに近いのではないかなと思う。なりきることによって彼らは絵巻の世界に行っていたのかもしれない。物語をみるということは、物語の話を理解するものではなく、物語の世界に入っていくことなのだ活動を通して捉え直すことができた

また、鳥獣人物戯画を題材に選んだことの意味を活動当初は捉えきれていなかった。中国の子どもたちにとっても今や身近となっている日本の漫画、アニメに深く関わる作品としても鳥獣人物戯画を題材にする意味があったのだと感じた。

## 「中国」という文化に触れてみて

福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース2年 山田 夏乃

### 1. 「中国」という文化に触れてみて

私達は、直に中国の人々や文化と接することで多くの刺激を受けた。自分たちが計画していた中国での出前授業が終わった後も、先生方に付き添ってさまざまな場所を見学させて頂いた。

上海師範大学附属小学校では、上海師範大学附属小学校の美術の授業、上海師範大学天華学院では実際の大学生が受けている美術の実技の授業、上海師範大学の理工学部、上海実験学校では学長の話の傍聴など、普段はできないような体験をすることができた。これらの体験を通して考えたことや今後の展望について述べていきたい。

### 2. 日本の美術の授業と違う？

上海師範大学附属小学校での授業はとても印象に残った。実際に子ども達が授業を受けている教室で私達も一緒に授業を受けることができ、その時の授業の



題材は、中国の伝統的な美術のうちわに花の切り絵を貼り付ける「扇子設計」というもので、教師はプロジェクターを使いながら子ども達に説明をしていた。子ども達は説明の手順通りに作業を進め、皆一斉に扇子を完成させていた。

他にも墨を少し付けたストローに息を吹きかけることで木の幹を描き、絵具で葉っぱの部分着色する「吹墨画」の授業や坂を逆向きに登るカラクリをつくる「圓錐体」の授業などの美術の授業をみせていただいたが、どの授業でも子ども達が「うまく」つくれるように考えられた授業だと感じた。子ども達のつくった作品はどれも似たものが出来上がっていた。ここに日本の美術と中国の美術で求めているものの違いがあるのではないだろうか。

### 3. 葛藤を味わう時間をつくっていく

日本では技術の習得よりも表現に重点をおき、作品の題材も子どもが興味を持っていることを引き出してくれるものが多いように感じる。一方中国では、手順が丁寧に説明され、言われた通りのものをいかに綺麗にきちんと作ることができるかと技法の理解・習得のように重点が置かれていたように感じた。勿論、今の段階ではどちらがいいとは言いきることはできない。しかし、「美術の授業は果たしてこれでいいのだろうか？」という疑問を抱いた。それと同時に今まで私が当たり前だと思っていた美術教育が、隣の国では違った指導がされているという違いにとっても驚かされた。

これらの体験をしたことで、改めて日本の美術教育とはどういうものなのか考える機会になった。以前、

日中の美術の教科書の比較検討を行った際、「中国は美術を学問として教えている」と私達は考察していた。そして、その時、私は「中国の美術の授業を受けたい」と思っていた。日本の美術の授業が私にとっては退屈で「もっと技術的なことを教えてくれればいいのに」とずっと中学生の頃考えていたからである。しかし、今回の訪問でその考えが変化した。個性よりも習得を重視した授業は確かに「できた!」という満足感を与えてくれるものかもしれないが、自分の個性を思いっきり表現できる場では無いように感じたからである。では、次に本当に美術の授業に必要なものは何か?と聞かれたとき、私は「内から表現する喜び」

を感じることはないかと答えたい。「うまく描きたい」という子どもに技術を指導することが悪いわけではなく、表現の先にある、描くこと、つくることのできた喜びや高揚感を子ども達に感じてほしいと思っている。私は作品を作るとき、その高揚感や、または思うようにいかない悔しさを常に感じている。一筋縄ではいかない内面の葛藤の末、手に入れることができる高揚感が表現の面白いところではないだろうか。私は近いうちに、教育実習で子ども達に教える立場になる。今感じているこの「喜び」を子ども達にも味わってもらえるような時間を作っていくことができれば、と今は考えている。

## 少し早いクリスマスプレゼント -上海の小学生へ行った造形遊び-

福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース4年 安本 晃央

私たちは上海の小学生にアルミホイルをたくさんプレゼントした。そして、「包んだり、ねじったりしながらアルミホイルと友達になってください」と児童に伝えると、授業の空間は一変してアルミホイルの魔法使いだらけの授業になったのであった。

アルミホイルは主に料理などに使われ、一般家庭でもよく見られる便利な道具の1つである。しかし、このアルミホイルがサツマイモを包んだり、オープンに少し敷いたりして使うのではなく、大きなバケツを包み込んだり、床いっぱい敷かれたりしたらどうだろう。想像しただけでも心が弾んではこないだろうか。

授業の導入でアルミホイルのレクチャーを行ったが、児童たちの動きは少なかった。私はその様子を見ながら児童とアルミホイルの対話のように感じた。包んだり、ねじったりを繰り返しながらアルミホイルの未知なる可能性を探っていたのではないかと考える。児童たちが一番多く使っていた表現が「包む」であった。包むことで包まれる物の表情が変化したり、同形の型を取ったりする事もできる。また、椅子の足同士をつなげるためにアルミホイルで包んで固めている子どももおり、物同士をつなげたりして新たな世界を生み出していた。

私は少ない時間の中でアルミホイルのいろいろな表情を知ってもらいたかったので、しばらくしてから各班に「クシャクシャ」の表現を見せる事にした。私は大きなアルミホイルを持ってこっそりと児童たちに忍び寄り、「ジャン!」と言いながら思いっきり大きくアルミホイルを出した。児童たちは自分たちでは出せないほど大きなアルミホイルに驚いていた。そして、アルミホイルが破けない程度にクシャクシャに丸めて広げると、アルミホイルの表面はキラキラとした輝きを放ち新たな表情を見せる。また、私は机だけでなく床まで世界を広げてほしかったので、児童が作っていたアルミホイルのお花を貸してもらいクシャクシャを床に敷くことでアルミホイルを土の地面に見立て、お花を生けた。すると児童たちは言葉がなくても理解して、もっとたくさんの花や草を作りクシャクシャの地面を広げていた。

別の班では、ねじったアルミホイルを隣の班とつな

げて橋を作ったり、巨大なロボットをみんなで作りもしていた。各班を見た後でクシャクシャの花園を作っていた班の様子を見ると男の子がクシャクシャを使って地面と机をつなげていた。嬉しそうにこっちを見ていたので“What’s This?”と聞いてみると“waterfall”「滝です」と答えた。机の上にある都市から流れてきた水が滝になって流れてきているとジェスチャーと言葉を使って伝えてくれた。「もっと大きく広げて」とジェスチャーで伝えると「分かりました」とグッドサインを出してくれた。

少ない時間の中で私たちは児童らに美術の楽しみ方を伝える事が出来たと感じる。日常にありふれたアルミホイルという素材と対話し、発見し、楽しみながら自分たちが作りたいものを表現することができていたのではないだろうか。

また授業を行って感じた事が2つある。「言葉について」と「上海での造形遊びについて」である。「言葉について」はもちろんお互いにできた「言葉」という壁である。話すにしても、聞くにしても、意思を伝えるためには通訳が必要で必ずお互いにラグが生じてしまうし、授業の慌ただしい中、聞きたい事をすぐに聞く事ができない。せめて、私をもっと英語を学んでいたら壁は少しでも低くなっていたかもしれないと考えると言葉の大切さを痛感した。しかし、同時に「美



術には言葉が必要ない。」ということも身を持って感じる事のできた時間であった。

また「上海での造形遊びについて」、上海の学校で授業参観を行う間に教室の見学もさせてもらった。教室の中には児童らが描いた作品が掲示されており、そこで驚いたのが、みんな同じ構成、同じ色の絵で個性が感じられなかったことだ。授業の中で書き方を教え

られ、使う色、画材の種類も限られていたため、児童の個性を引き出すような奇抜なことをさせられないようにも感じた。だから、アルミホイルを使った造形遊びで爆発的に動けたり表現したりすることができたので、児童たちは発散するかのように騒がしく、楽しそうに授業が展開されたのだと感じた。

## カメラを通して見た3人の実践

### —上海師範大学附属第一小学校での出前授業を振り返って—

福井大学教育地域科学部 美術教育サブユース2年 中村 栞

昨年12月22日～25日まで中国、上海へ訪れ、上海市にある上海師範大学第一附属小学校で鑑賞型の実践を行った。私自身は、記録係として他のメンバーのそれぞれの実践を、カメラを通した客観的な視点から綴ってみたい。

#### 1. 三好さんのブース

最初に自己紹介をしたとき、子ども達が無反応だったので、大丈夫かな…と少し不安を感じたが、それぞれのブースへ移動してくださいと合図をすると、すぐに立ち上がり「どんなことがおきるんだろう」というようなわくわくした雰囲気が変わった。

実際の活動が始まると、はじめ子ども達は、実践者が何をやろうとしているのかの趣旨が伝わっていないように見て取れた。そのため、子ども達は実践者の言葉や表情を読み取ろうと真剣な表情で実践者の顔を見ていた。実践者本人達も、言葉が通じず、通訳を通さなければ自分の思っていることも伝えられないため、戸惑っていた。やはり、事前に通訳とやり取りをして（概要が書かれたプリントを送るなど）、少しでも子ども達の実践できる時間を増やせたらよかった。

はじめは言葉の壁に四苦八苦ししながら、それでも実践者達はジェスチャーや簡単な英語で子どもに話しかけたりする姿が見えた。実践者たちの何かを伝えようとする姿勢から、子ども達も何かを聴き取ろうとする姿勢が印象的だった。1回目から子ども達が楽しそうだった三好さんのところでは、子ども達の声がワッとなるたびに、他のブースの子ども達が振り返って、「何をやってるんだろう」と興味を持っている姿もみえた。1回目には、実践者がやりたいことまでいかないブースもあったが、2回目からはそれぞれテンポがよくなり、全体がワイワイと色々な声が飛び交うようになってきた。

それぞれのブースが、それぞれの特徴をもっていて、特に印象に残っているところを挙げていく。

まず、三好さんのブースでは、はじめからすごく盛り上がっていたブースである。その理由は三好さんの恥ずかしがらずに、面白いポーズを面白い表情で行っていたことにあるだろう。壁を作らずに子どもと接したため、子ども達も壁を無くし積極的に参加していた。三好さんだけでなく、子ども達にもモノマネを

やってもらっていたが、「2人でやろう」の一言から三好さんと2人でモノマネする姿が見え、そのおかげで子どもとのコミュニケーションも増え、他の子ども達も、もっと楽しんでどの絵のジェスチャーをしているのか当てていた。子ども達は他のブースに目をやることもなく夢中になっていて、笑顔がすごく目立っており一体感のあるブースとなっていた。

#### 2. 西本さんのブース

次に西本さんのブースでは、はじめは三好さんのブースのような盛り上がりはなかったものの、西本さんの伝えようとするのを必死に聴いていた。ブースの子ども達をさらに半分にし、絵をみてそこに出てくる登場人物になりきる活動だった。しかし、2つのグループを1人でみることは難しい。西本さんが話しかけに行っていないグループの方はどのような行動をするのかとみていたら、そのグループの中で自分はどんな動きをすればいいのかと考え、「君はこんな動き？」などと話し合っていた。そして、自分たちで「この絵の登場人物たちはこんな動き！」と動きを真似して楽しんでいった。西本さんの趣旨を理解し、子ども達だけで話し合っただけで動きを実践している姿は、とても楽しそうだった。時には、カメラを向けている私に向かって、真似した動きをやってくれる子どももいた。子ども達の主体性がとてもあり、自由に楽しむことができているブースであった。





### 3. 山田さんのブース

最後に山田さんのブースでは、最初こそうまく伝わらず、やりたいことができていなかったが、徐々にとても素敵な子どもの姿がたくさんみることができた。3回目の活動では、殻から生まれた〇〇が描かれた絵をみて、真似をするというものだったのだが、殻（段ボールでつくられた殻）を渡された子ども達は、恥ずかしがりながら絵に描かれている卵から出てきたものを表現しており、それをみた子ども達が、「これだー!」、「これ!」といって一斉に絵を指で指す姿があった。それまでは、2人1組で行っていたようだが、全員で一体になってやることで、たくさんの人の面白い真似を見ることができ、子ども達はとても楽しんでいた。山田さんが声をかけなくても、やりたい子がいたりして、小道具があるためにその絵の中のものになりきることができたり、あの殻を持ってみたいというような興味にもつながったのだろう。このブースも最後には一体感のある素敵なブースになっていた。

最後の終わりの合図の時は、「もっとやってほしい」という子ども達の気持ちが伝わってくるくらい、子ども達は笑顔だった。



### 4. 運動会絵巻の鑑賞

そして、4つ目の鑑賞授業の活動として、福井大学附属小学校の子ども達の作品である、『運動会絵巻』を全員で囲み、見るという活動を行った。この『運動会絵巻』とは、子ども達がそれぞれの運動会の思い出を描いた画用紙を、横1列につなげて巻物にしたものである。数メートルにもなるその作品を、上海師範大学附属小学校の子ども達と私達とで囲み、思ったことを周りの人と自由に共有した。

はじめ、その大きな巻物を広げた瞬間、何も指示を出さずともその巻物の大きさやインパクトに興奮した子ども達は、すぐさま巻物の側に駆け寄ってきた。そしてそれぞれに絵を指さしながら言葉を交わしていた。言葉が通じない私達にも、思っていることを伝えようと話しかけてきた。その姿から言葉も通じなくてもいいから自分が感じたことをとにかく誰かに聞いて欲しいという興奮がこっちまで伝わってきた。「このキャラクターが好き!太陽の絵!」と英語やジェスチャーを使って話しかけてくる子どももいて、日本の子ども達が描く絵と自分たちの描く絵の違いにも驚いていた。少ない活動時間だからこそ、自分の感じたことを我先にと伝え合い、子ども達同士の会話が弾んだ。しかし、この前の3人が行った鑑賞授業が無かったらこのような和気あいあいとした雰囲気での活動は生まれなかつたらろう。3人の活動がきっかけとなっ



て、「言葉が通じなくてもこの人たちは受け止めてくれる」ということを子ども達が感じ、子ども達の肩の力が抜け会話が弾んだ。

### 5. 振り返りの活動から

活動の最後に子ども達から、全ての活動を振り返って感想をもらった。「日本の子ども達はすごく羨ましい。先生たちがこんなゲームみたいな面白いことをたくさん考えてくれるから。」という感想を言ってくれた男の子がいた。もちろん、日本では常に今行行った活動のように体を動かさせて、面白いことをやっているわけではないが、この男の子の言葉を聞いて、日本の美術教育で大事にしている、「五感を働かせて、さらに楽しく学べる」という点について改めて考えることができた。



## インターンシップ／週間カンファレンス報告

### 教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校 田中 紗衣里

早いもので、4月から始まったインターンシップも気がつけばもうすぐ1年を迎えようとしている。週3日の附属中学校でのインターンシップでは、生徒たちと関わりながら、クラスに入って学級、学年の活動や教科の授業を見たり、部活動を見たりしている。授業以外にも研究会に参加させていただき、先生同士がよりよい授業をしていくために学び合う姿も間近で見ることができている。研究会では、いろいろな教科の先生の意見を聞くことができる。授業のねらいや手立て、それぞれの先生による生徒の見取りを聞くことは、私にとって様々な視点を取り入れ、考え方の多様性を生み出す。そして、「自分もこんな授業をやりたい」、「生徒にこんなことを考えてほしい」といった意欲の高まりにもつながっている。

現在、自分の教科である家庭科の授業実践にも取り組んでいる。私が入っているクラスで授業をさせていただいているが、「こんな意見が出てくるだろうから、こんな風に進めていきたい」と生徒たちのことをイメージしながら授業を考えている。メンターの先生から、「以前やった授業実践より、子どもたちの反応も良かった。生徒との信頼関係ができていからこそだと思う」というお言葉をいただいた。生徒のことを考えて授業をするのは当然のことではあるが、経験の

少ない私にとって、中学生がどういう思考をたどって考えを深めていくかということは、なかなか想像しにくいことだと思っていた。しかし、4月から生徒の様子を見て、関わってきたからこそわかることが自然と授業にも表れていたのだと思う。

授業をするたびに、教職大学院の先生方や院生、大学の家庭科の先生、附属中学校の先生など、多くの方々に見ていただき、様々なアドバイスをいただいている。授業をしながらでは見きれない子どもの様子を教えていただくことは、その後の授業づくりの参考になる。教科の内容に関することも助言していただける。様々な教科の先生にも見ていただくことで、他教科とのかかわりの深い部分に気づくこともできる。授業の技術的なことも教えていただける。授業が自分の思ったようにいかず、落ち込んでしまうことももちろんあるが、それ以上に1回1回の授業でたくさんの学びがあり、「もっとこうしたい」、「こんなことにも挑戦していきたい」と思うことができている。

今、自分の置かれている環境は非常に恵まれていると思う。たくさんの人の支えの中で本当に多くのことを学ばせていただいている。そのことに感謝しつつ、これからももっと学び続けていきたい。

### 教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属中学校 棟田 章裕

躓きの連続の2年間…。日々課題が生まれ、正解のない問いに悩み、苦しみ、それらがモヤモヤのまま山積みになっていく…。私にとってつらいものであったが、そのような学びを続けることができたのは、福井大学教職大学院で学ぶことができたからだと思ふ。そして、残り数週間でそのような日々が終わってしまうことを名残惜しく思う。本稿ではそのような2年間の充実した学びを支えていた長期インターンシップと週間カンファレンスについて記していきたいと思ふ。

まず簡単に、教職大学院の学びの場を記す。大きく分けると2つあり、1つは、教職大学院の拠点校での学びの場である。私は拠点校の1つである福井大学教育地域科学部附属中学校で長期インターンシップ、課題別実習を行わせていただいた。私は附属中学校という素晴らしい先生方のコミュニティの中で、子どもと共に歩み実践しながら、授業、学級経営、生徒指導、3年間かけて子どもを育てることなど、多くのことを学ばせていただいた。もう1つの学びの場は、教職大学院における学びの場である。そこでは、週間カンファレンス、月間合同カンファレンス、集中講座、ラウンドテーブルが行われ、1週間の振り返りから、1か月、4か月、半年と様々なスパンで重層的に実践を省察する

ことで学び進めてきたように思う。そして拠点校と教職大学院での学びの場が互いに関わり合うことで、私の学びが深まっていったように思う。

修士1年時は、拠点校で長期インターンシップを週3日間行う。私は1つの学級に入り学級の先生、子どもたちから学んでいった。1年間を通して子どもたちと関わり、子どもたちの変容に寄り添い、時には仮担任として、朝の会、給食指導、清掃指導、帰りの会で実践を行った。そして先生と語り合う時間をいただく中で実践を振り返り、また週に1度ある学年会では、協働して子どもたちを育てる先生方の手だてや思いを知ることで、自らの実践に少しずつ繋げていった。しかしながら、私はそれらの学びをスムーズに進めることができていなかったように思う。“どのように子どもと関わればいいのかだろうか”、“私の支援や指導は適切ではなかったのではないだろうか”、“子どもたちの姿をどのように捉えればいいのか”などの問いや悩みが生まれ、躓いていたからである。そのような問いや悩みは、教職大学院の週間カンファレンスにおける『学びの振り返り』という時間に、他の拠点校の院生と教職大学院の先生方とで4、5人の小グループをつくり、自らの実践を語り合い、実践を意味づけ価値づけられていった。私は悩みを語る中でモヤモヤが整

理されたり、異なる視点から実践を捉え直すことができたりと、次週の拠点校での学びに繋がっていった。余談になるが、私は振り返りの場においても“自らの実践を他者にうまく伝えることができているのだろうか”、“語り合いに参加できているのだろうか”という悩みも生まれていた。この悩みは、様々な授業研究会に参加した時と共通の悩みであり、試行錯誤の連続であった。

再び拠点校での学びに戻るが、私は理科が専門ということもあり、1～3年生の理科の授業も参観させていただいた。初めは授業の参観の仕方もわからず、先輩や同学年の院生に参観の仕方を学びながら行ったり、提案授業での先生方の子どものみとりをお聞きしたりする中で、子どもの学びをみとる意識を少しずつ育んでいった。理科については、先生方と語り合わせていただく中で、単元・授業のねらい、教材・教具、育みたい力など様々なことを学びながら単元での授業づくり、そして授業実践を行った。そこでは、毎時間授業後に先生と授業を振り返り、ご助言いただきながら次時の展開を練り直し、学習指導案の書き方も含めて学んでいった。さらに、1年間を通して他教科の先生方4人と週に1度、研究主題やサブテーマに沿って語り合う部会（附属中学校では同様の部会が他に3つある）にも参加させていただいた。他教科の先生方の実践やサブテーマの捉えをお聞きする中で、理科と共通するところや教科を超えて子どもを育む視点など、理科を

様々な視点から考えるようになっていった。このような学びの中で、“子どもはどのような学びをしているのだろうか”、“単元を通して本当に育みたいことは何か”、“3年間のカリキュラムの中でこの単元はどんな位置づけになるのだろうか”、“知識・技能をどのように育むとよいのだろうか”などの問いが生まれていった。このような授業に関する問いは、週間カンファレンスで同教科や同校種と教職大学院の先生とが小グループになり、教材研究や授業検討を行う時間で深めていった。そこでは、実験室を使わせていただき、理科の院生同士で協働して教材研究を行ったり、学習指導要領や教科書などを検討したりすることで、子どもに育む力やどのように育むかを議論していった。これらが、拠点校での自らの授業実践や子どものみとりを支えた1つであったように思う。

ここまで、教職大学院での学びの一部を長期インターンシップ、週間カンファレンスの観点で記してきた。今回記すことができなかつたが他にも、様々な学びが有機的につながっているように思う。そして現在、未だ私の課題は山積みである。しかし、私は教職大学院での2年間、様々な方々と出会い語り合うことで、悩み躓きながらも支えられて学び続けることができたように思う。そして今後、教育現場でさらに新たな課題や問いが生まれていくように思う。その際、様々な他者と実践を語り合い協働しながら問い続けることで、学び続けていきたい。

## スクールリーダーだより

### 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校中学校 / 畠田哲也

本校は福井市内にあり、県内の知的障がい特別支援学校の中で最も歴史のある学校です。現在、小学部17人、中学部18人、高等部22人の子どもが在籍し、嶺北の各地から通ってきています。学校の近くにえちぜん鉄道の八ツ島駅があり、公共の交通機関やスクールバスを利用している子どもが多数います。芸術家襲撃の壁画「平和の楽園」が校舎の壁に色鮮やかに描かれ、「明るく、自由で、みんな仲良く、励まし合って、力いっぱい、楽しく生きていこう」という雰囲気で教育を実践していきたい」という願いを象徴しています。昨年7月には、校舎の改修工事を終わり、グラウンドが全面芝生になり新しい建物ができました。1階には体験学習が3つあり、物作りや体験活動ができます。2階には、研修や会議等に使うことができる多目的室があります。子ども達は、新しく恵まれた環境の中で明るく・元気に学習をしています。

本校では、平成24年度から「学校・地域・家庭のつながりの中で育つ ～一人一人が活動と参加の質を高める～」のテーマで3つの分科会を設けて研究に取り組んでいます。

教師は、自分が取り組みたいテーマを選び分科会の所属を決めます。分科会は、クラスや学部、校務分掌を解いた縦割りの教師で構成され、子どもの育ちや実

践を縦の軸や広い視点で考えることができます。

ここでは、第3分科会「家庭生活の充実につながる支援の在り方」の取組について紹介します。家庭生活を充実させるために第3分科会では、「学校全体としての取組」と「個別事例の取組」の二つの面から実践を進めてきました。

学校全体の取組は、以下の5つです。

- ①保健教育
- ②食に関する指導
- ③保護者学習会
- ④健康相談データベース
- ⑤校内支援体制づくり

これらの5つの取組を通して、家庭と教師が協力して子どもを育てていくことを目指しています。教師は協働で実践を行い、夏期研究会や11月に行われた夏期研究会などで実践を語り、省察していくことで専門性と同僚性を高めていくことを目指しています。「保護者と学習会」では、教師も参加をして共に学ぶことを目指しています。6月に「性に関する学習会」、10月に「進路に関する学習会」を開催しました。二つの学習会を通して保護者同士がつながりを持つ姿が見られ、教師と保護者が同じ目線で意見を交わすことができ

した。縦割りの組織で研究することで、より保護者の



## 啓新高等学校／稲木穰

ICT (Information and Communication Technology) の発達に伴い、教育現場は大きな変化の時期を迎えていることは周知のとおりです。Digital Native ともよばれる現在の児童・生徒たちは生まれたときから携帯電話やインターネット、ゲーム機端末に溢れている環境で育ってきた世代であり、彼らにとってICTはもはや特別な存在ではありません。文部科学省は全国の公立学校(小・中・高校)を対象に「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」を毎年実施しており「学校におけるICT環境の整備状況」と「教員のICT活用指導力」の2点を大きな観点としています。福井県教育委員会でも「スマート教育推進事業」をスタートさせ、ICT機器の長所を生かした授業改善の取組を推進しています。本校としても「小中学校でICTを活用したデジタル教育を受けてきた生徒」を受け入れている以上は、私学としてさらに発展した授業を提供していかなければならないとの方針からICT機器の導入と授業実践が、学校全体で進められています。

本校における現段階でのICTを活用する目的を「おもにプロジェクター等の大型表示機能を利用した授業実践活動から授業の研究と改善を図り、生徒の思考や理解を深め、学力向上につなげる」と「ICTを利用しての先進的な授業により、地域社会をリードする人材を育成することにより、他校との差別化を図る」と設定しています。ICT教育の実践は教科単位で取り組み、授業ワーキンググループ担当の教員が主体となり、教科ごとに活動計画を立案・実践することを主軸としています。啓新高校は4つの学科(普通・情報商業・ファッションデザイン・調理)と普通科での3つのコース(普通・保育・福祉)の学科・コース体制に新しく再編され、3年目を迎えました。授業ワーキンググループとは、それぞれの学科・

ニーズに応じた保護者学習会が実施されました。「校内支援体制作り」では、学校長と特別支援教育コーディネーターが核となって、保護者が一人で悩むことや担任が抱え込むことがないような体制を構築してきています。

個別の事例では、家庭と連携をした小学部1事例、中学部2事例、高等部3事例をまとめてきました。個別の事例においては自分が実践したことを書いて、分科会で語り傾聴してもらってまとめていくことによって、教師のネットワークができ、小学部から高等部までの縦のつながりをより意識するようになってきています。また、家庭と連携する際に教師がもつとよい視点や学校生活での子どもたちへのよい関わり方について整理をしています。研究や実践を通して、子どもと教師、保護者が共に学び合うことのできる学校を目指していきたいと思っています。

コースに見合った授業を構築するために、各教科から代表1名ずつの教員によって主に年間指導計画の作成や、評価基準の改善を目的に編成されています。私自身も英語科の代表との立場から授業ワーキンググループに参加し、学校全体のICT教育の牽引・調整役として実践を重ねています。

加えて本校では平成21年度より授業研究に対する意識拡大を目的に校内の有志が集い、授業研究会が定期的に活動しています。福井大学から森先生、松田先生を始め、多くの大学の先生方の助言と協力をいただきながら、この授業研究会のメンバーの教員にもICT機器を率先して活用するようはたらきかけ、学びあうコミュニティとして授業力向上に努めています。

平成24年度当時の本校のICT環境は、コンピューター室を除いて、整っているとは言い難い状態でした。校内に3つあるコンピューター室を日常的に使用していたのは情報商業科と、基礎学力の定着をねらいとしたeラーニングシステムで学ぶ進学コースの生徒くらいで、あとはインターネットを使って調べ学習するときなどにたまに使用する程度。一般教室にTVモニターはなく、それぞれの校舎の各階にキャスター付きの台に乗せられた分厚いブラウン管のテレビが1台ずつあっただけで、それに教員がビデオデッキやDVDプレイヤーを接続して使用していました。

この年の夏休みに一部の教室に試験的に天井固定型のプロジェクターが設置され、エンジニアによる使用法の講習会や研修への教員の積極的な参加など、2学期に向けてICT教育の活動が本格的に始動しました。さらに学校全体で授業での実践を検討し、月1回進捗状況を学科コース長会で報告するなどして採用が決定し、現在ではすべての一般教室にこのプロジェクターが設置されています。このプロジェクターはマルチインターフェースを備えておりDVD、VHS、書

画カメラ、ノートPCが同時に利用できます。またHDMI端子によりタブレット端末が使えるのはもちろんのこと、USB端子に直接メモリーを接続して、簡単に画像や音声を授業で利用することも可能です。また電子ペンにより映し出した映像に、様々な色や太さの文字や線、図形を書き加えることができます。プロジェクターからの映像はマグネットで黒板に固定できる、ロール式のポータブルスクリーンで映し出し、板書との併用を図りました。

授業ワーキンググループと授業研究会のメンバーとして、ICT機器を使った授業を率先垂範していかねばならないとの思いから、私が担当する全ての授業において何らかの形でICT機器を利用することを課題として実践しています。実際に使ってみてのメリットは、何よりも生徒の興味・関心を引き出しやすいことに尽きると思います。「ICT機器による教材の拡大提示が有効」であることは知っているつもりではいましたが、生徒の興味・関心を引きつけるツールとしてこんなにも絶大な効果を発揮することに驚きました。授業ワーキンググループと授業研究会のメンバーからのICT機器の利用によるメリットをまとめると、「動画再生や画像提示、電子ペンを用いることにより板書の手間が省けることが時間短縮に繋がり、生徒の活動時間が確保できる」「板書では難しかった正確で迅速な図や表の提示が可能である」「Word, Power Point, Excelなどのソフトを授業者だけでなく、生徒も利用できる」「ICT機器を利用することにより生徒のプレゼンカアップにもつながる」「提示した内容の保存が可能」「教材を校内の共有LANでデータを一括管理することにより、すべての教員が閲覧でき、使用することができる」「教科や学科・コース体制で連携共有することにより、教える内容に差が出にくい」との意見が聞かれました。

ICTのデメリットとして「設置や運用管理の費

用」「ハード機器自体の突然の作動不良とその対応」「教員が個人レベルで機器を扱えるか」「授業ごとの機器の設置の手間」「教科書会社からのデジタル教科書提供の有無」「生徒同士のコミュニケーション不足」が挙げられています。私自身も「生徒がICTから離れた場面で理解し、活動する時間を設けないと『（授業者は）見せて教えた気』『（生徒は）見てわかった気』に陥りやすい」ことに留意しています。

生徒1人に1台のタブレット端末を与えての授業が全国的な広がりを見せていますが、課題も多いのも事実です。現段階ではおもに授業者がICT機器を扱う授業を展開することを中心に据えています。まずは教員がICT機器の扱いに慣れ、その効果を実感することが授業での良きファシリテーターになることにつながり、生徒の主体的な学びになると考えています。多くの教員がICT機器の導入により、従来の授業観からの脱却のヒントを掴むことができました。従来の黒板とチョーク、手作りの教材や、実物のリアル感を否定することなく、ICTはあくまでも道具と割り切り、振り回されないことが生徒の主体的な学びを支えるということを忘れず、魅力ある生徒づくり・学校作りのために実践と研究を重ねていきたいと思います。



## あわら市芦原中学校／石崎隆幸

あわら市芦原中学校は坂井北部丘陵地にあります。生徒数312名、教職員35名の学校です。「生き生きとして、熱意を持って『わかる授業』づくりに取り組む教師集団」づくりにどのように取り組んできたか、今年度の取組を一部紹介します。

4月22日（火）第2回職員会議；本年度の取組について、全体計画やイメージ図を用いて説明しました。合同カンファレンスで教えていただいた「先生方の興味関心を基に」を意味する部分を地下（見えない部分）に移動、学習指導などの重点項目を幹の部分（見える部分）に移した図を提示しました。

5月29日（木）前期指導主事訪問；昨年度の授業研究で行ったことを広めようと、全学年で付箋紙を使った研究会を行いました。

6月16日（月）現職教育「研究テーマを決めよ



う」；どんなことに取り組むかについて、教員同士がグループで話し合う会を開きました。限られた時間の中で有意義な話し合いができるように、当日の流れに

ついてまとめたレジュメを配布しました。森先生、半原先生、風間先生が同席され、にこにこ顔で各先生の話をお聴きくださいました。また、会の最後には取組への助言と励ましの言葉をいただきました。

8月12日(火) 実践レポート原稿締め切り日；全教員が夏休み前までの取組についてA4サイズ1枚のレポートを書いています。内容は「取り組んだこと」と「学んだこと」です。今年で5年目になります。いろいろな意見や思いもあるでしょうが、どの先生も締め切り日までにきちんとサーバに保存してくれていました。その後、製本し全員に配布しました。

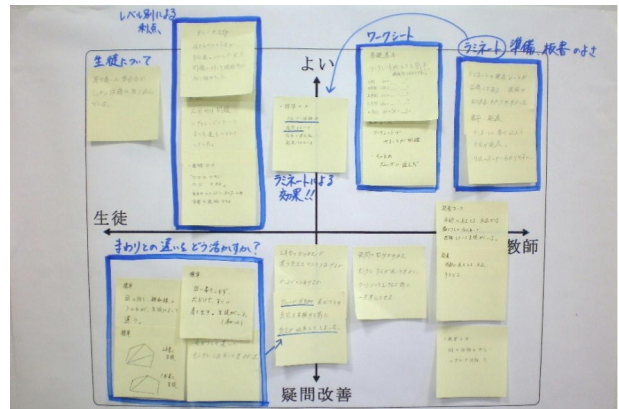
10月15日(水) 現職教育；夏休みに書いた実践レポートをもとに、自分の思いをグループで語る日です。芦原中で研修中の長野県の先生から、「福井県の(芦原中の)素晴らしいところ」も発表いただきました。くじでグループを決めたにもかかわらず、各テーブルでは授業づくりや個別の援助について話が盛り上がり、時間が足りないという表情も見られました。

第2回指導主事学校訪問に向けて；文系教科1クラスと理系教科1クラスで研究授業を行っています。今回は事前研究会を行う時間が設定できませんでした。そこで各先生に資料を配付し、「異教科の授業研究会に出席する設定での研修会」となるようにしました。また、11月合同カンファレンス後に行われた「Co-PARE 第10回研究会」でいただいた資料『授業の見方と授業研究の居方』を先生方にも配布し、事前に授業を参観する観点を考えてもらえるようにしました。また、他校から授業研究会に参加される先生方へは、当日どのように授業を参観していただくか、さらに研究会の持ち方について資料を作成し配布しました。

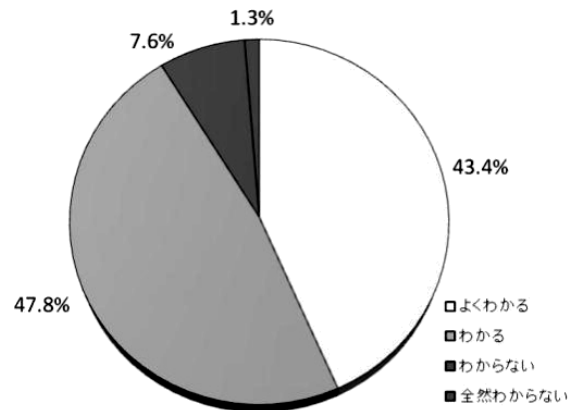


11月28日(金) 第2回指導主事訪問日；5限目の共同参観、先生方は、付箋紙を書きながら参観していました。参観されている先生方の姿に「それぞれがそれぞれの参観する観点をもって授業を、生徒を見取っている」と感じ、先生方の一生懸命さが伝わってきました。授業研究会では進行表を元に、「私はこの授業で…」と自分の考えを話されている先生の姿が多くありました。また、書いた付箋紙を読み上げながら貼

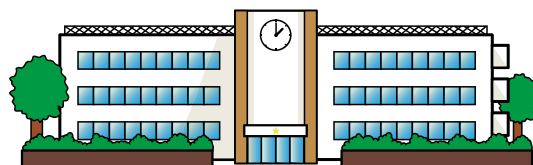
り、全員の発表が終わったところで付箋紙をグループ分けして貼るグループもありました。違うグループでは、研究会が終わった後に一斉に付箋紙を貼っていました。研究会の感想には、座標軸を使って研究会を行うことに対して「盛り上がりよかった」「話しやすい雰囲気になった」との意見が多くありました。



12月上旬、「授業で『わかった』と感じたことがありますか」と全校生徒にアンケートを行いました。その結果、「よくわかる」「わかる」と答えた生徒の累計は91.2%になりました。昨年度末と比較して、若干その割合は変化しましたが、スクールプランに掲げている「よくわかる・わかる生徒80%以上」は達成することができました。



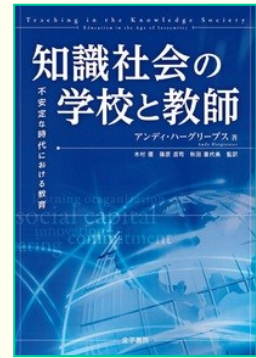
教職大学院の先生方に応援していただきながら、以上のような取組をしてきました。これからも、日々「生き生きとして、熱意を持って『わかる授業』づくり取り組む教師集団」づくりを目指し取り組んでいきます。



## 書評

## 知識社会の学校と教師 -不安定な時代における教職-

アンディ・ハーグリーブス著  
木村優・篠原岳司・秋田喜代美（監訳）  
金子書房 2015年



本書は、ボストン・カレッジのアンディ・ハーグリーブス教授が2005年に公刊した“Teaching in the knowledge society: Education in the age of insecurity”の全邦訳で、教授の著作の中で初めての邦訳出版となる。日本において知識社会が顔をのぞかせつつある現在、学校と教師たちは知識社会の本格的な到来に備えるために、知識社会がもたらす様々な問題状況を乗り越えるために、同僚と、保護者と、地域の人々と、そして子どもたちと共に新しい実践をデザインし、専門職の学び合うコミュニティの創造に挑戦している。

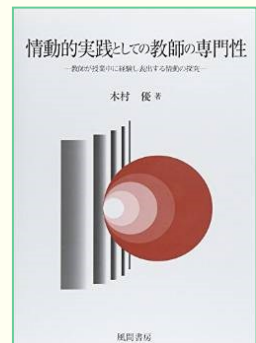
本書で明瞭に描き出される知識社会の構造とそこで暮らす私たちに必須となる能力と精神、知識社会がも

たらす弊害とそれ乗り越えるための戦略、そして知識社会の学校づくりの指針としての「学習する組織」と「専門職の学び合うコミュニティ」についての考察が、「今、この時」の日本の教育研究と教育政策のあり方、そして日々の教育実践と学校づくりの方向定位を示している。

監訳者の一人として、教育研究者はもとより、教育政策立案に従事する方々、そしてなによりも日々、教育の最前線で子どもたちを真摯に温かく育てておられる学校の先生方が本書を手にとっていただき、これからの教育と明日からの実践をデザインするためのヒントにさせていただけると幸いです。（木村 優）

## 情動的实践としての教師の専門性 -教師が授業中に経験し表出する情動の探究-

木村優著  
風間書房 2015年



本著は教師の専門性における“情動的实践(emotional practice)”についてまとめられたものである。教師の専門性が教師の思考様式や実践的知識を基盤として追究されてきた中で、これまで十分に着目されてこなかった情動の観点から分析した点に本著の意義がある。

著者は授業における教師の情動的实践について明らかにするために、教師の情動を「経験」と「表出」といった2つの側面から分析している。まず、「経験」については、教師の快情動体験や不快情動体験、フロー体験に内在する実践的意義を捉えている。特に「授業における情動の経験が導く省察過程モデル」(p103)を提示することで、感情の種類によって様々な認知や思考過程が展開されることを明らかにし、そのような感情経験が省察を促し、専門性の発達に寄与

していることが示されている。また、「表出」においては、教師の情動表出に内在する専門的意義と社会的機能が捉えられている。教師の自己開示と情動表出様式から、教職特有の情動労働に関する実証的知見が示されている。

以上のように、本著は教師の専門性における情動の布置を提示してくれると共に実践におけるその重要性を示してくれるものである。情動は今後の教師の専門性を捉える上では欠かせない要素である。本著は今後の教師教育への示唆を与えてくれると同時に、実践を問い返す機会を提供してくれる。教育実践者をはじめ、教師教育に携わる関係者、またはこれから教師を目指していく人々に是非、読んでいただきたい著作である。（藤井 佑介）

## ◆◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◆

### 研究紀要 第31号

福井県特別支援教育センター（平成25年3月）

去る2月12日、第32回実践研究発表会が行われた。そして、まもなく研究紀要第32号が刊行されるこの時期に、なぜと思われるかもしれない。実は、そこには、次のような理由がある。それは、先日センターに関わらせていただいた1年目のサイクルが終わり、自分自身を振り返る意味で読み直したくなり手にとったことである。福井県特別支援教育センターは、1983年（昭和58年）県立病院内に設置され、現在に至っている。センター内には、これまでの特別支援教育の手書きの系譜が掲示されており、その重みを感じる。この間一度も途切れることなく毎年研究紀要を刊行し、その系譜を記録として残すとともに、実践研究発表会の開催を通じて遍く現場を啓発し続けている。

センターの特色は所員の方々が園・学校に出向いて行う「訪問相談」にある。地域を支え、つなぐ所員の皆様の訪問に1年間、同行させていただきながら、私自身多くのことを学ばせていただいた。この紀要には、出向いた先の状況を理解し、学校全体の体制整備を図るという「組織成長支援」の取組の三年次の様相が12のストーリーとして描かれている。それは単に事実だけを時系列に並べたものではなく、「授業」から立ち上がる挑戦そのものであることに改めて共感し

た。もう一つ特徴的なことは、＜所員の学び＞が記録されていることにある。ここに成長し続けていく組織としてのセンターの強みがある。傍観者から参観者、観察者の自身の感情と、相手の感情、相手のやりたいことに向き合いながら、苦悩しつつも、よい授業、よい教室、よい学校を求めていく中で、所員の内なる変容の様相も描かれている。

厳しい寒さも和らぎ、桜の季節がやってくる。教職大学院の拠点として、関わらせていただいたことに改めて感謝申し上げる。そして、32冊目の途方もない「ほんまもんの挑戦の記録」の刊行を待ち遠しく思う。

（風間寛司）



### Schedule

2/27 Fri - 3/1 Sun 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 Spring Session

3/23 Mon 学位伝達式

#### 【編集後記】

春の実践研究福井ラウンドテーブルに発行される今号に実に多くの方にご寄稿いただきました。今回はラウンドテーブルへの参加人数もニュースレターの枚数も福井大学教職大学院始まって以来の豊かさ（多さ）です。それでも、一人一人の実践、そして「声」を大事にする営みは変わりません。当日ニュースレターと同じく、それぞれのZoneとテーブルで豊かな実践交流が行われている風景を想像しています。（半原芳子）

教職大学院Newsletter No.70

2015.2.28発行

2015.2.28印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dptdfukui@yahoo.co.jp